

水の文化

特集

南西諸島 水紀行

水の文化 July 2022 No.

71



町 亞 聖

フリマナウンサー

「とーとうがなし」の心を忘れずに

「町家のルーツは与論島なの？」
 「晩酌をしている父に尋ねると「そうだ」という答えが返ってきて驚きました。父方の故郷は福岡だと思っていましたがまさか『与論島』とは。夏休みに沖縄に行こうと見ていたガイドブックに「与論ネーム（シマナー）」という小さなコラムがありました。これは祖先の名前を後世に伝えるために戸籍上の名前とは別に祖父や祖母のシマナーを子どもに付ける風習だそうです。その一つに「マチ」という呼び方が。ただこの呼び名と苗字の「町」の起源は別だったので、思いがけずわが家のルーツを知ることができました。

少しだけ父の思い出話を。福岡県大牟田市の三池炭鉱の町で育った父は高校卒業後に上京したものの経済的に苦しく進学はかなわず……。若くして母と結婚し3人の子どもを養うために必死に働いていましたが、暮らしては楽ではなくどんなにがんばってもうまくいかない人生があるというのを父の背中が教えてくれました。典型的な九州男児で機嫌が悪いときにお酒を飲むと卓袱台をひっくり返すこと

も。母が病で倒れて車椅子生活になっても相変わらずでした。そんな父親でしたので親戚づきあいも苦手で、与論島の話は聞いたこともありませんでした。そして叔祖父の案内により妹と一緒に与論島へ。空港に迎えに来たホテルのバスの運転手さんの名前がいきなり「町さん」で、ああ与論がルーツなんだと実感しました。幻の島と言われる百合ヶ浜や大きな双子の珊瑚など透明度抜群のコバルトブルーの与論の海は今も忘れられません。30代で亡くなった祖父は長男で、父も長男、そして私が長女ということで何十年ぶりに〈総領〉が島に戻ってきたと町長さんはじめたくさんの人が歓迎してくれました。会う人会う人全員が親戚だと言っていました。たがどこまで本当かは確かめようもなく……。当時、民放のアンウンサーだったこともありテレビ観ているよと皆さん声をかけてくれました。母を亡くした直後で大きな喪失感を抱えていた私たち姉妹の心を緩やかに流れる島時間が癒してくれました。

今年には沖縄の本土復帰50年の節目に当たりますが、沖縄とともにアメリカの統治下に置かれていた奄美群島。さらに遡ると奄美は琉球王国や薩摩藩に支配されるという歴史が。一文字の苗字が与論含めた奄美に多いのは島出身であることがわかるようにするためという意味合いがあったようです。島の歴史はあまり語られていませんが、過酷な時代を生き抜いた祖先が居てくれたからこそこの世に生まれてこられたと思うと本当に感謝です。

感謝と言えば与論には「へりごと」という意味で使われている「とーとうがなし（尊加那志）」という言葉があり、尊加那志で始まり尊加那志で終わると言われるほど大切にされています。「とーとう」は尊い、「かなし」は神に対する尊称でそのまま訳すと「尊い存在」ですが、生きとし生けるものすべてを尊ぶ謙虚な心を表しています。与論の古い呼び名は「ユンヌ」。権力による抑圧や差別に翻弄されてきた哀しい過去を変えることはできませんが、だからこそ違いを認め受け入れる多様性を「ユンヌンチュ（与論の人）」の一人としてもつていたいと思います。



ひとしづく



町 亞聖 (まち あせい)

小学生のころからアナウンサーに憧れ1995年に日本テレビにアナウンサーとして入社。その後、活躍の場を報道局に移し、報道キャスター、厚生労働省担当記者としてがん医療、医療事故、難病などの医療問題や介護問題などを取材。〈生涯現役アナウンサー〉であるため2011年フリーに転身。脳障害のため車椅子生活を送っていた母と過ごした10年の日々、そして母と父をがんて亡くした経験をまとめた『十年介護』(小学館2013)を上梓。医療と介護をテーマに取材、啓発活動が続ける。公式ブログ <http://ameblo.jp/machi-asei/>

神奈川県から与論島を訪れた若いご夫婦。今回が2回目の来訪。1回目は台風に遭遇したため再訪したそうだ。与論島にはそういう引力がある

コロナ禍で不自由な生活を強いられるなか、「遠くへ行きたい」という欲求が募ることはないだろうか。その目的地を考える際、「南の島」を思い浮かべる人は多いかもしれない。

日本は島国だ。海上保安庁は日本の構成島数を6852と公表し、国土交通省は有人島を416とする。その島で人が暮らせるかどうかは、「水（淡水）を確保できるか」が左右する。古来、湧き水のそばに人びとは住み着き、集落を形成した。今も祭祀の場は湧き水と分かちがたくある。

今回は数多ある島のなかから、九州以北の「ヤマト」と沖縄島以南の「琉球」の文化的要素が混在する南国の島々、南西諸島（琉球弧）に目を向けた。

島々を巡りながら、その魅力や文化、環境、そこに暮らす人びとと水のかかわりに目を向けることで、本来あたりまえに得られるわけではない「水」への眼差しと、島国・日本のあり方について思いをはせたい。



特集

南西諸島 水紀行

目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく「とーとうがなし」の心を忘れずに 町 亞聖

特集 南西諸島 水紀行

- 6 総論 最大限の努力と工夫で「足るを知る」島暮らし 須山 聡
10 屋久島 山に対する畏敬の念が残る「水」の島
18 加計呂麻島 祭祀の痕跡が残る静謐な島
24 与論島 身も心もほどけるような楽園の水事情
30 文化をつくる
行ってみなければわからない 多様で柔和な島の文化 編集部

Column

- 33 水の余話 島暮らし「三種の神器」 浦 環

連載

- 34 水の文化書誌 61
地球温暖化・気候危機・気候崩壊を論じる(上) 古賀邦雄
36 みず・ひと・まちの未来モデル4
首都圏の「過疎のまち」に
なぜ若い移住者が増えているのか? 野田岳仁
42 食の風土記 17 強毒が極上の珍味に変わる ふぐの子 むか漬け
44 Go! Go! 109水系 22
市民がつくった心地よい空間あふれる矢作川 坂本貴啓
50 センター活動報告
51 編集後記/ご案内
(敬称略)



【総論】

最大限の努力と工夫で 「足るを知る」島暮らし

かつて柳田國男は「島国日本の抱える問題の縮図は島にある」「離島生活の研究(1966)」と記した。島は本土に比べて、変化も比較的ゆっくり進む。なかでも本土から距離のある南西諸島琉球弧は、多様な文化・風習が残っているとされる。駒澤大学文学部教授の須山聡さんは奄美群島を長く研究し、日本地理学会の離島地域研究グループで活躍する。2022年(令和4)4月から1年間、奄美大島に滞在し研究とフィールドワークを重ねる須山さんに、加計呂麻島でお話を聞いた。

先進地だった 近世までの島

そもそも日本自体が「島国」ですが、慣例的に日本の国内法で「島」といった場合は、北海道・

本州・四国・九州・沖縄島を除いた島を指します。そのうち名前がついている島は6000程度といわれてきました。しかし、私が国土地理院の地図で調べてみると、先の主要5島を除き、畳一枚程度の岩礁もすべて含めるなら、日本にある島は約11万5000です。数はともかく、西日本の海域に集中しており、瀬戸内海、九州沿岸、南西諸島で約90%を占めます。

目的が地域の解明である地理学の観点からすると、島の最大の特徴は「自己完結的な空間」であること。島は周りを海に囲まれているため自己完結性が高く、地域の特徴が顕著に見えやすいのです。例えば、ほぼ自給自足の生活を送っているとしたら、農業と漁業がどのような組み合わせで労働配分されているか、といったことが解明しやすい。



奄美大島



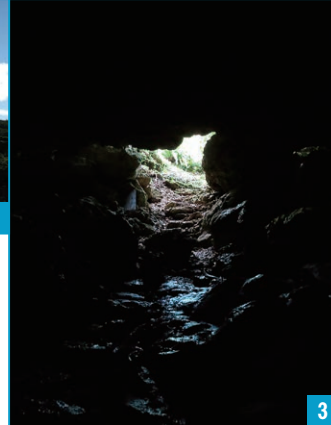
インタビュー

須山 聡さん

駒澤大学文学部地理学科教授

Satoshi Suyama

1964年富山県生まれ。筑波大学大学院 地球科学研究科 単位取得退学。博士(理学)。筑波大学講師、駒澤大学専任講師、同助教授を経て2006年より現職。専門分野は人文地理学、景観論、離島研究。主な著書に『奄美大島の地域性——大学生が見た島/シマの素顔』(海青社 2014)、『在来工業地域論』(古今書院 2004)、『離島研究I~VI』分担執筆(海青社)など。



1 屋根に溜まった雨水を雨どいから貯水する三宅島の雨水貯留のしくみ。大きな石垣が貯水タンクとなっている。主に洗濯に使っているという 2 宮古島の東平安名崎(ひがしへんなざき)のそばにある洞窟の湧水。 3 洞窟の中から見た入り口 1 2 3 提供:須山聡さん 4 アメリカの環境保護NGOの「死ぬまでに見るべき世界の絶景13」に、日本で唯一選ばれている青ヶ島。丸で囲んだ部分は向沢取水場の集水面 5 青ヶ島の向沢取水場。山肌をコンクリートで固め、雨を貯水池に溜めることで水問題を解決した 4 5 提供:青ヶ島村役場

島ごとに異なる 水源の確保

その一方で、島は決して孤立無援ではありません。航空路や海路で他所とつながり、観光客も訪れます。一部の島を除いて、自動車ですら直に本土と行き来できないため人の出入りがはつきりする。地表面における人間の活動を把握しやすいことも、島を研究する意義の一つといえます。

日本で島をメインの研究対象にする機運が盛んになったのは、日本地理学会に離島地域研究グループができた2000年ごろからです。単体として島を研究しても、私たちが常に考えるのは、島と本土との関係。本土が中心で島が周縁かと思いがちですが、そうした構図は明治時代以降の近代化の中で形成されました。江戸時代までは、例えば瀬戸内海の島は廻船の寄港地でしたから、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている大崎下島(広島県)の御手洗港などは潮待ち・風待ちの港として非常に栄え、当時は呉や広島よりもにぎやかでした。

つまり、近世まで島は一種の先進地だったのです。近代化の過程で次第にさびれ、それが戦後まで続いて、今となっては全国的な人口減少、少子高齢化、過疎化の波と歩調を合わせています。

利用可能な淡水の有無。これが島での居住を左右する最大の条件です。水源を涵養する陸地の広さも必要なので、必然的に佐渡島(新潟県)や淡路島(兵庫県)のように大きな島が有利になります。

地質的には、古生代〜中生代にできた変成岩(注1)や堆積岩(注2)などで地盤が形成されている島には水が多く溜まります。例えば、堆積岩に花崗岩(注3)が貫入してできた屋久島(鹿児島県/P.10-17)には大きな川が何本もあり、豊富な水資源を水力発電に利用しています。対して与論島(鹿児島県/P.24-29)のような隆起サンゴ礁の島は透水性の高い石灰岩質なので雨が降っても地下にしみ込んでしまうため、天水槽などを工夫し、限りある水資源を有効に使っています。

総じて淡水が有り余る島は数少なく、基本的にどの島も水資源の確保に苦心してきました。天水を溜めるのがその方法の一つ。三宅島(東京都)では屋根に落ちた雨を雨どいで集めて貯水しています。これは伊豆諸島に多く、今でも洗濯に使っているようです。有名な

(注3)花崗岩

粗粒で、粒のそろった岩石。主に石英、カリ長石、斜長石、黒雲母からなる

(注2)堆積岩

堆積作用によって形成された岩石の総称。

(注1)変成岩

すでに存在していた岩石(火成岩や堆積岩など)がマグマによる熱、あるいは地殻変動などの強い圧力によって変化してできた岩石。

のは青ヶ島（東京都）。山の斜面をコンクリートで固めて雨を集め、水道にも利用しています。

もう一つの方法は地下水の活用です。宮古島（沖縄県）では洞窟の地下に水が湧いていて、そこを中心に集落が発達している構造が見られます。宮古島や喜界島（鹿児島県）には地下水の流れをせき止めた地下ダムがあります。

沖永良部島（鹿児島県）には湧水が20カ所以上あり、これらが集落の中心です。50年ほど前まで沖永良部島や加計呂麻島（鹿児島県）などでは「ノロ」と呼ばれる女性が祭祀を執り行っていました。ノロはもともと琉球王朝に命じられた「公務員」。琉球は祭政一致（注4）国家で、王が世俗の世界を、妃が信仰の世界を治めていました。男性と女性がペアになって聖俗を支配するのです。一つの集落のなかで村役人の妻や妹がノロとして祭祀を司っていました。

淡水が出るところに人々が居住し、集落が形成され、祭祀も水源の場所と結びついていたのは、特にサンゴ礁の島でよく見られる空間構造です。奄美群島や沖縄諸島の沿岸部の多くの集落は、扇状地の末端に湧水や井戸をもち、そこが祭祀の舞台になっていました。



6 沖永良部島の住吉集落にある湧水「暗川（くらごう）」この奥の地下に水が湧いている。地理学の分野では有名な場所 7 すり鉢状のくぼ地「ドリーネ」を活かした貯水池（久高島） 8 上空から見た奄美大島 9 奄美大島の宇検村久志集落で土俵入りする親子 6 8 9 提供：須山聡さん

与論島や沖永良部島は石灰岩質で水が溜まりにくいいため、石灰岩台地に特有のすり鉢状のくぼ地「ドリーネ」を四角く区切り貯水池にして農業用水を確保しています。地形を巧みに利用しているところが興味深いです。

サトウキビの安定生産を可能にした安定給水

南西諸島の農業生産の基盤は今でもサトウキビです。元をたどれば、沖縄諸島、奄美群島のサトウキビは、薩摩藩の財政を潤すために裁

培強制された植民地作物でした。

砂糖の原料となる日本の作物はテンサイとサトウキビ。テンサイは寒冷地が、サトウキビは亜熱帯地が栽培に適しています。ちなみに日本で使う砂糖のおよそ8割はテンサイ糖です。

サトウキビの栽培にとりわけ重要なのが水。水さえ豊富に与えればサトウキビは育ちます。

基幹作物のサトウキビの収量を上げるため、南西諸島では農業改善事業に注力してきました。1980年代からの灌漑水路と給水設備の整備によって、降雨量の多

寡だけに左右されない安定的な生産が可能になったのです。とりわけ安定給水できるスプリンクラーの導入は画期的でした。

それが最もはつきり見えるのは徳之島（鹿児島県）。大規模なサトウキビ畑が広がり、スプリンクラー灌漑が整備されています。

ところが常時給水には副作用もあります。赤土流出が起きました。現在、流出量を計測中のようにですが、サンゴ礁への影響が懸念されています。海水が濁り、サンゴと共生する植物プランクトン「褐虫藻」が光合成をできなくなり、ひ

（注4）祭政一致

祭祀（まつり）と政治（まつりごと）が未分化で一致している状態を指す。



いてはサンゴ死滅のおそれがある。赤土流出に關しても、例えば排水路の末端に沈殿池のよう

な終末処理場を設けることで対処できると考えられます。テクノロジを適正に使えば、島の環境改善は十分に可能です。

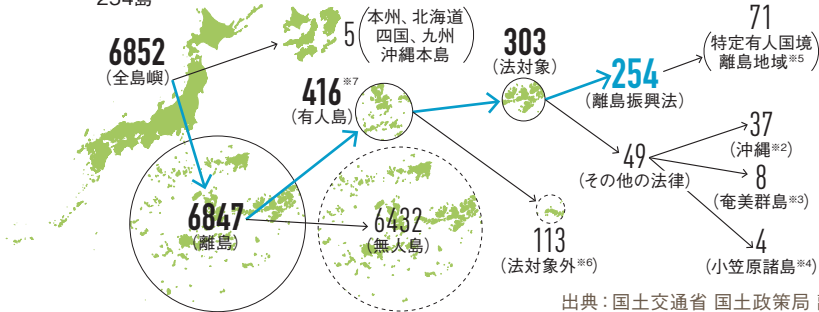
奄美大島や加計呂麻島では、非常に小規模ですが、サトウキビと牛の飼育の複合型循環農業に取り組む事例もあります。サトウキビの残滓で堆肥をつくり圃場に還元し牛の飼料にもするわけです。また、サトウキビを白糖の原料ではなくそのまま黒糖にして菓子に使うなど、高付加価値化に取り組む農家もあります。

与えられた資源量で最大限の効率を發揮

離島振興法※1によって日本では70年近くにわたり島のインフラ整備に取り組み、今ではすべての島で連絡船が接岸でき、電力・水道などの基本的なインフラは本土と同様に整備されています。離島振興法が当初目指していた「離島の後進性の除去」は、少なくとも

日本の島嶼構成

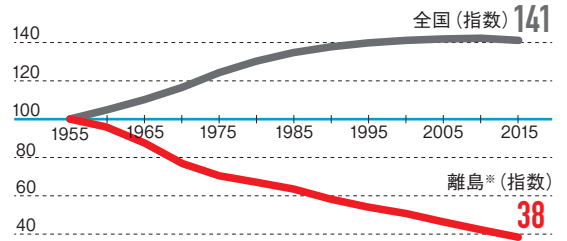
国土交通省によると、日本は6852の島で構成。本州、北海道、四国、九州、沖縄島を除く6847島が離島。このうち離島振興法による離島振興対策実施地域に含まれる有人離島は254島



出典：国土交通省 国土政策局 離島振興課「離島の現状と取り組み事例について」(資料2) 2022年4月

離島と全国の人口推移 (1955年を100とした場合)

1955年(昭和30)から2015年(平成27)までの人口推移を見ると、全国の人口が約4割増えている一方、離島の人口は約6割減



※離島振興対策実施地域に含まれる有人離島254島
※数値は2015年(平成27) 国勢調査結果

ハード面では達成されました。ソフト面では、イターン者の積極的な受け入れや、修学旅行の誘致から始まり島を学びのフィールドにしたり、「山村留学」に取り組む島もあります。

ただし、日本という国全体が特にバブル崩壊以降、前例のない取り組みに挑みにくい「現状維持バイアス」にとらわれる傾向が根強く、島もまた同様です。これをどう打破していくかが今後の課題でしょう。

また、昔から続いている大事なもののだから元の形のままで残そうという考え方にも「現状維持バイアス」がかかっているかもしれない。簡易水道ができて農業用水が整備され、安定的に供給できるのであれば、不安定な自然水源に頼らなくていいし、おのずと水と祭祀との結びつきも薄れていきます。しかし一方で、祭りは集落の求心力として残っているものが多いです。

一例を挙げると、奄美大島に残る赤ちゃんの「初土俵」です。秋の豊年祭と合わせて行なわれることが多いのですが、宇検村の久志集落では、

2020年



(令和2)に久しぶりに赤ちゃんが生まれました。とてもよいことなので「土俵入り」して集落全体でお祝いしました。そうした祭りのときは、集落を離れた人たちが一時的にせよ戻ってくる。集落の仲間であることを確認するため、祭りは絶対に必要なのです。「水を大切にしよう」という原初の目的は失われたかもしれませんが、今でも祭りが存続している理由はそこにある。形のみならず存在意義も変わっていくのは当然です。そうしたことも含めて、島の暮らしに学べる点は、水資源の確保に象徴されるように、与えられた資源量のなかで最大の効率を發揮する工夫が随所に見られることです。それは決して貧しさではありません。

総体的には人口減少が今後も続くなかで、観光客向けの事業などを営むイターン層が定着し、また退職後に「やっぱり生まれ育った島がいい」と帰島して悠々自適の余生を送るUターン層もいます。限られた条件のもと「足るを知る」幸せが身についた島の暮らしは、しぶといのです。

(2022年4月27日取材)



※1 離島振興法(1953年制定/10年間の時限立法)
 ※2 沖縄振興特別措置法(2002年制定/10年間の時限立法/1971年制定の旧法は2002年失効)
 ※3 奄美群島振興開発特別措置法(1954年制定/5年間の時限立法)
 ※4 小笠原諸島振興開発特別措置法(1969年制定/5年間の時限立法)
 ※5 有人国境離島法(2016年制定/10年間の時限立法)
 ※6 陸上交通が常時確保された離島など ※7 ここからは内水面離島の沖島(滋賀県)を含む



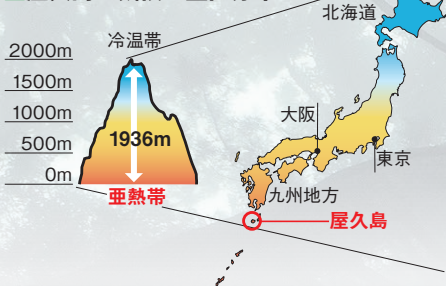
【屋久島】

屋久島

山に対する畏敬の念が残る「水」の島

1993年(平成5)、白神山地とともに日本で初めて「世界自然遺産」に登録された屋久島。樹齢2000年とも7200年ともされる大木「縄文杉」で知られる。屋久島は「ひと月に35日雨が降る」といわれるほど雨が多く、しかも土壌がやせているため、この島の杉はゆっくり成長する。また、その豊富な水を活かして60年以上前から発電分離を行ない、ほぼ自然エネルギーだけで電力を賄ってきた。水に恵まれた島の「自然と人の共生」を探る。

■屋久島の気候の垂直分布



出典:屋久島町役場 観光まちづくり課発行『屋久島&口永良部島総合旅情報』(p.5)を参考に編集部作成



屋久島

面積504.88km² / 6133世帯 / 1万2913人
『SHIMADAS』(日本離島センター 2019)より

1 着陸直前の飛行機から見た屋久島。山が険しい 2 70人乗りのプロペラ機で屋久島到着 3 屋久島空港の到着口。こぢんまりとした素朴な空港



海岸線からそびえる 屋久島の山々

羽田から鹿児島まで飛行機で約2時間。そこからプロペラ機に乗り換え、約40分で屋久島空港に到着する。空から見る屋久島は、山が海岸線に迫っていた。

タラップを降りて空港の建物に向かう。到着口を出ると、トレッキングウエアに身を固めた女性グループや家族連れ、ビジネスマンなどの姿が見られ、小さな空港のロビーが活気づいている。空港の外には、ついさっきまで上空から見ていた山がそびえ立っていた。なんだか背筋の伸びる思

いと同時に、「屋久島に降り立った」という期待がさらに膨らんだ。これから、どんな5日間になるのだろう。

時代に翻弄された 森との共生の道

周囲約130km、面積約500km²の屋久島には、九州一高い宮之浦岳をはじめとする1800m以上の山々が連なる。地形的な特徴と黒潮の影響で、雨もとても多い。「屋久杉自然館」に向かうと、松本薫館長がにこやかに迎えてくれた。屋久島の森には、屋久杉(注1)の利用を目的とした紆余曲折の歴史がある。屋久島の人々は、本来神聖な屋久杉を伐採することはなかったが、江戸時代、薩摩藩が屋久杉を年貢に指定した。伐り出した屋久杉は、主に関西の寺社仏閣などの屋根材に使われた。

「このとき屋久杉の5〜7割が伐採されたそうです。杉は日本固有の木で1種のみですが、雨の多い屋久島の杉は樹脂分が多く、腐りにくいのです」と松本さんは言う。

明治時代になると、今度は屋久島の森が国有化され、1920年(天正9)に正式に国有林になった。主要な川沿いに木材搬出のための

(注1)屋久杉

屋久島では樹齢1000年以上のものを屋久杉と呼び、それ以下のものは小杉(こすぎ)と呼ぶ。縄文杉は現在確認されている最大の屋久杉で、島のシンボリック的存在。

林業基地の面影が残る集落跡

縄文杉に至るトロッコ軌道を40分ほど歩くと、小・中学校の校庭が残る集落跡に到着。この一帯が小杉谷(こすぎだに)。1923年(大正12)にふもとの安房からトロッコ軌道が敷かれ、屋久杉搬出のための事業所、さらにそれに携わる人々と家族が暮らす集落として栄えた。ピーク

時には約540人が暮らしたが、国有林事業の縮小とともに1970年(昭和45)に事業所が閉鎖。集落としての役目も終えた。

少し上に登ると、炭焼き窯の跡、瓦や瓶、食器の残骸などが見られ、かつてはここが生活の場だったことがリアルに感じられる。



小杉谷小・中学校の跡地(左)。暮らしの痕跡が残る(右)

樹齢約3000年ともいわれる「紀元杉(きげんすぎ)」。ツガ、ヒノキなど21種類の着床樹が確認されている。車を降りてすぐ見られるので観光客にも人気



苔むした屋久島の森。こうした林床が降った雨を蓄えるダム役も果たしている



5

4

4 屋久杉を割ってつくった短冊形の薄板「平木(ひらぎ)」。かつて年貢として薩摩藩に納めた。屋久杉は樹脂が多く腐りにくいため、平木は高級屋根材として重用された

5 屋久杉自然館で館長を務める松本薫さん。小杉谷からさらに奥地にあった石塚集落の出身。自然館の立ち上げに携わった

■屋久島のゾーニング

I 保護ゾーン

原生的な自然と、信仰や畏敬の対象としての奥岳地域が残る島の中心部

II ふれあいゾーン

生態系を保全しながらも、一定の範囲内で産業を含む人間活動が行なわれるエリア

III 生活文化ゾーン

人と自然のかかわりが盛んなエリア



屋久島環境文化村マスタープランより

1993年(平成5)、屋久島は日本で最初のユネスコ世界自然遺産に登録された。きっかけになったのは保護運動、そして鹿児島県がその前年に打ち出した「屋久島環境文化村構想」も大きい。これは、自然と人が共生する屋久島独自の地域づくりの施策で、その一つに島を3区分し、「保護」や「活用」などのエリアに区分けするゾーニング(注2)がある。

「伐採された歴史がありながら世界自然遺産になった例は珍しい。古くから人びとの営みとともにあ

森林軌道が敷かれ、特に高度経済成長期には大量伐採が進んだ。

世界自然遺産に指定され、手つかずの原生林が広がるイメージも強い屋久島だが、江戸時代からこんなに人の手が入っていたことに驚くかもしれない。時代時代で人びとの葛藤もあっただろうと、話に耳を傾けながら思いが巡る。

一方、昭和40年代には輸入材が増え、国有林事業は縮小。同時に、屋久島の森を再生し、守ろうとする動きが広がる。そのとき、国を動かす勢いで保護運動の中心に立ったのは、都会に出て生活していた屋久島出身者たちだった。島の住民は、身近にある自然の価値にまだ気づいていなかった。

(注2)ゾーニング

自然環境を保護しながら、人と自然が共生する屋久島らしい自然空間の秩序をつくるために設けた枠組み。なお、環境省、鹿児島県、屋久島町などの自然環境行政では現在「屋久島・口永良部島ユネスコエコパーク」のゾーニングをもとに進められている。

<https://yakushima-kuchinoerabu-br.com/overview/>

った点で、屋久島は文化遺産にも
近いと感じます」と松本さん。

屋久島が世界自然遺産に登録さ
れた年、「屋久島憲章」が制定され
た。条文1には、「水」に関するこ
と（注3）が書かれている。松本さ
んに、その理由を尋ねた。

「これほど水が豊かな島はほかに
ありません。木、苔、川、焼酎ま
ですべてのベースは水。花崗岩の
肥沃ではない土地に屋久杉のよう
な巨木があるのも、水（雨）のおか
げです。ここに住むわれわれ自身
も水への感謝を忘れないという意
思表明の意味でも、条文の最初に
掲げたのでしょ」

屋久島の水が生む 暮らしを支える電力

この豊富な水の恩恵を受けてい
るのは、自然だけではない。屋久
島では、60年以上前から島内の電
気の99%を水力発電で賄っている。
電力を供給するのは、日本で唯一
の炭化ケイ素（注4）の製造メーカ
ーである屋久島電工株式会社（以下、
屋久島電工）だ。本業がありながら
電力会社並みの熱意で島民の暮ら
しを支えている。島を4地域に分
け、地元の協同組合などが屋久島
電工から電気を購入し、各地域に



屋久島電工 発電事業部 事業部長
の長野政章さん。安房川は水量と落
差が水力発電に向いていると語る

配電を行なっている。

屋久島の豊富な水資源に着目し、
当初は製造のために水力発電所を
つくった。しかし、「今は住民の生
活が最優先です」と話すのは、同
社の発電事業部 事業部長の長野政
章さんだ。「工場のラインは、島に
供給する電力を確保したうえで動
かしています。雨の少ない時期は
工場の運転を控えます」

取材に伺った日は朝から土砂降
りで移動も億劫なほどだった。し
かし、「今日の雨はいい雨」と長野
さん。ダムに溜まるような風向き
の雨がしばらく降っていないため、
この雨に期待しているという。私
たちには憂鬱でも、屋久島の人び
とには「いい雨」。自然との向き
合い方にハッとさせられた。

同社は現在、安房川水系にある
3つの発電所から5万8500kW
の電力を供給するほか、森林軌道
の補修や整備なども行なう。雷が
激しいときは深夜でも発電所に泊
まり込み、停電に備える。

今でこそ自然エネルギーが注目

されているが、屋久島の取り組み
は早い。「実はあまり知られてい
なくて、驚かれることが多いので
す。島の生活を支援したい思いは強
いのですが、アピール下手です
ね」と、長野さんは謙虚に笑った。

世界遺産の森が抱える 水を取り巻く環境課題

取材の2日目に、縄文杉まで往
復約22kmを歩いた。約10時間かか
るが、500mlの水筒を1つ持参
すれば事足りる。それは途中に山
水が湧き出るポイントが何カ所も
あり、喉を潤してくれるからだ。
改めて水の豊かさを実感した。

世界自然遺産に登録されてから
多くの登山客が訪れる屋久島だが、
環境への課題もある。なかでも深
刻なのがトイレだ。縄文杉までの



6



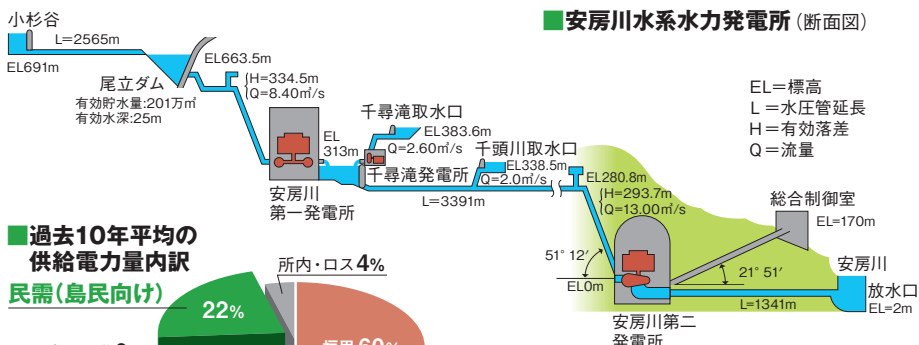
7



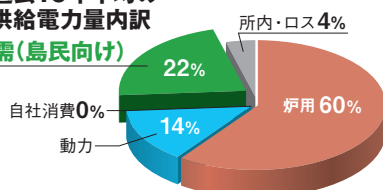
8

6 荒川登山口から縄文杉に向かうには、このトロッコ軌道を片道約8km歩く 7 屋久島電工が管理運営する安房川第一発電所 8 地下に設置されている安房川第二発電所

安房川水系水力発電所（断面図）



過去10年平均の 供給電力量内訳 民需（島民向け）



2点とも屋久島電工提供資料をもとに編集部作成

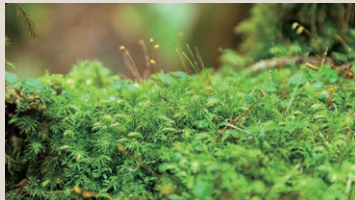
（注4）炭化ケイ素

天然にはほとんど存在しない化合物。硬く耐熱性
や耐久性に優れるため、耐火剤や研磨剤として利
用されてきた。近年半導体の材料として注目される。

（注3）水に関すること

「屋久島憲章」の条文1には次のように書かれている。「わたく
したちは、島づくりの指標として、いつでもどこでもおいしい水
が飲め、人々が感動を得られるような、水環境の保全と創造に
つとめ、そのことによって屋久島の価値を問いつづけます。」

縄文杉までの登山道では、苔が絨毯のように足元に広がる神秘的な光景に出会える。土埋木（切り株）の表面もびっしりと苔に覆われている。苔の多くは密生してフサフサと見えるが、じっくり観察してみると種類もさまざまなことに気づく。その数は屋久島の森だけで600種とも700種とも。私たちが歩いた日は雨天だったが、水分をたっぷり含んだ苔に水滴が滴る様子もまた趣深かった。



屋久島町 観光まちづくり課係長の岩川健さん。屋久島の出身。どこでもおいしい水が飲め、水力発電で電力の99%以上を賄っているこの島に「時代が追いついてきましたね」と話す



「現地埋設処理」をとっていたが、環境への負荷が大きく廃止した。「雨が降ると地中に流れ出して、悪臭や土壌汚染が深刻になりました。屋久島の大事な水源を自分たちの手で汚しているようなものだと、15年ほど前から20Lのポリタンクに移し替え、人力でふもとまで担ぎ出す方法に変えました」と、屋久島町 観光まちづくり課係長の岩川健さんは話す。

2005年（平成17）年には、縄文杉へのルート沿いに2基のバイオトイレが設置された。便器内に投入したおがくずをスクリーンで攪拌させ、微生物が尿尿を分解するというもので、臭いもほとんどない。電力を供給するのは屋久島電工。ただし、年に数回はおがくずを交換し、トロッコで運び出す必要がある。用を足した後は登山客自身で持ち帰る携帯トイレの利用も呼びかけているが、定着は難しい。「日本人は清潔なトイレを好むので、ためらうのでしょうか。登山客が減ると観光にも影響するので、行政がきちんと整備すべきとの意見もあります。何が一番いい方法か、模索しているところです」

イターナー者が選択する 自然と寄り添う暮らし

縄文杉への行き帰り、登山客を案内するガイドたちを多く目にした。その大半は、県外からのイターナー者だ。町が力を入れることの一つに移住者の定住促進があり、移住者の割合は年々増えている（2020年度は236人）。岩川さんは、イターナー者は新たな風を入れてくれる存在だと言う。

「イターナーの方々には、集落の集まりなどにも積極的に参加してくれます。もともと彼ら彼女らの視点を

ルートにいくつかトイレを設置しているもの、維持管理や汲み取りの問題があり、数も十分ではない。以前は、汲み取りが容易

入したおがくずをスクリーンで攪拌させ、微生物が尿尿を分解するというもので、臭いもほとんどない。電力を供給するのは屋久島電工。ただし、年に数回はおがくずを交換し、トロッコで運び出す必要がある。用を足した後は登山客自身で持ち帰る携帯トイレの利用も呼びかけているが、定着は難しい。



13



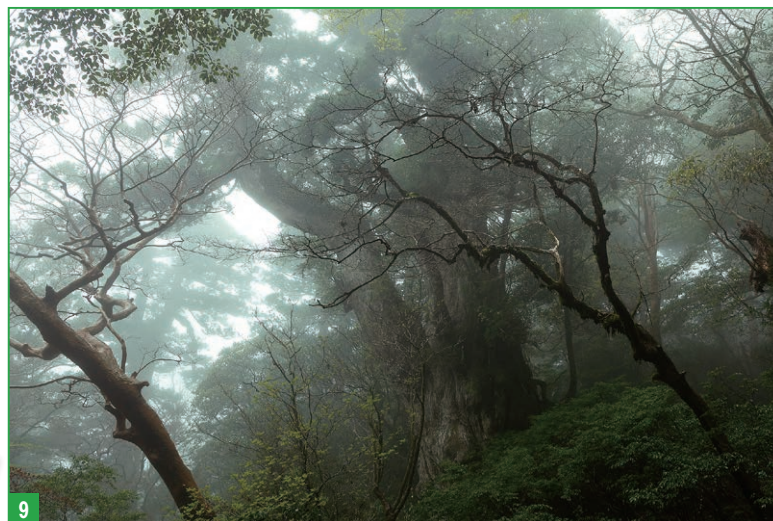
12



14



15



9



11



10



17



16

9 幽玄な雰囲気漂う縄文杉。かつては近づけたが、樹皮を剥いで持ち帰った者がいたため今は展望デッキから見るしかない。それでも、もはや木というより別の何かのような迫力がある。樹高25.3m、胸高直径5.22m 10 縄文杉へ向かう登山者たち。トロッコ軌道を約8km歩いた後、約2.5kmは本格的な山登り 11 登山道の脇にある沢。歩いているのが温いても飲み水に困ることはない



19 18

取り入れてまちづくりに活かせれば、屋久島はよりよくなっていくはず。私たちも柔軟に対応していかなければいけません」



20

古き良き里の風景

島の北西に位置する永田集落には、今も住宅地を水路が走り、水がとうとうと流れる。「生活に密着した水路で、昭和30年代前半まで使っていました。野菜などは早朝、洗濯は朝9時以降、おむつは下流でと決まっていたんです。うちは豆腐屋なので早朝から天秤棒を担いで何往復もしました」と住民の方。また、永田集落は九州で2番目に高い永田岳を奥岳としており、岳参りの経験もあるそうだ。「兄と2人、おにぎりとお毛布を持って1泊2日で登っていましたよ」と懐かしそうに振り返ってくれた。



の集落に近い手前の山を「前岳」、奥の高い山々を「奥岳」と呼び、神山としてきた。岳参りは集落ごと

町では、島暮らしを試せる「暮らし体験住宅」を設けるほか、2021年からは空き家バンク制度も開始。仕事はツアーガイドをはじめとする観光業や飲食店の経営など、三次産業に携わる移住者が多い。

屋久島公認ガイド（注5）を務める飛高章仁さんは、17年前に大分県から移住してきた。

「ガイドを始めて17年経ちますが、屋久島でガイドを務める以上雨は避けて通れません。場合によってはお客様の命にもかかわるので、天候を見ながらの判断には毎回いちばん気を遣います。でも、参加者と感動を共有できる瞬間はうれしいですね」と飛高さんは言う。

15年前に神奈川県から移住してきたのは、安房で漁師をしながらダイニングバー「NINA」を経営する八峠信幸さんだ。「以前からマグロ漁船への憧れがあった」と話す。

「漁は自分には縁のない世界だと思っていたのですが、屋久島には一次産業が身近にありますし、船酔

いにも強いので漁師をやってみようと思ったのです。親方について仕事を覚えてからは、朝海に出て、帰ってきて魚をさばいて、夜に店を出す生活でした。夏は潜って夜光貝などを獲ることもあります」

また、八峠さんはこうも話す。「屋久島は自然豊かな観光地ですが、海岸に行くときゴミもたくさん落ちていて、これがリアルな部分でもあると住んでみて感じます。都会にいたときは道端にゴミが落ちていても拾わなかったのに、今は自然に拾える。ビーチクリーンもしています。日々、島に生かされていると感じるので、汚れているのは嫌なんだと思います」

島の文化を象徴する「岳参り」が復活

屋久島には、500年以上前から「岳参り」という山岳信仰の行事がある。屋久島の人びとは自分

に行なわれ、各集落の代表者が年2回、神山の山頂の祠に参拝する。そもそも屋久島は川を境に集落が分かれており、集落ごとに多様な文化が生まれてきた。

岳参りでは、海や里の恵みである海砂、米、塩、焼酎などを山の神へ届けて集落の繁栄を願い、山からは「神の花」とされるシヤクナゲを持ち帰り、山の恵みに感謝する。屋久島環境文化財団事務局長の高良尚男さんは、「岳参りこそが屋久島の文化の中心」と話す。

「岳参りの風習から、屋久島の人は海と山と深くつながって暮らしてきたことがわかります。私は2年前にこちらへ赴任しまし

たが、『岳参りの迫体験が屋久島を知ることだ』と思い、島内の祠をすべてお参りしました」と高良さん。

ところが、岳参りは戦後を境にいったん途絶えている。険しい山を登って下りられる若者が島を出



21

（注5）屋久島公認ガイド

ガイド業は特に人気があり、より質の高いガイドを養成するため、町が認定する「公認ガイド」の制度がある。一定条件を満たす必要があり、現在75名が認定されている。

18島の南西部にある栗生（くりお）集落を流れる栗生川。この集落はかつて島で一番トビウオ漁が盛んだったという 19屋久島南西部にある「大川（おおこ）の滝」。落差は88m。日本の滝百選にも選ばれている 2021西部林道で出会った野生のヤクシカとヤクシマザル。いずれもニホンジカ、ニホンザルの亜種。ヤクシマザルはニホンザルより小型で毛も長い



24



23



22

22宮之浦集落の人たちが岳参りを行なう際に祈念する「牛床詣所(うしどこもいしよ)」 23宮之浦岳へ岳参りする人びと。海砂、米、焼酎などを山の神に捧げて祈願し、山からシャクナゲを持ち帰り皆で分け合う 24山頂にある祠の内部 25提供:屋久島町観光まちづくり課

ることが増えたためだ。
2005年(平成17)、島最大の集落である宮之浦で岳参りを復活させたのが、スポーツ用品店「ナカガワスポーツ」の代表である中川正二郎さんだ。中川さんは岳参り復活の経緯を振り返る。
「世界遺産になってから山の荒廃や軽装の登山者の遭難事故が目立つようになりました。屋久島の森は想像以上に深く、奥岳で迷ったらずまず出てこれません。そんな状況を見て『今の屋久島に足りないものは岳参りだ』と感じたのです。屋久島の人は昔から山に畏敬の念を抱いてきました。屋久島の登山道は本来、岳参りのために通された道です。登山者はそこを使わせてもらっているのに、山への感謝の気持ちを忘れていきます。『山をナメとる!』と思いました」
そこから中川さんは、集落内外の経験者に話を聞き、有志とともに復活に取り組んだ。実はほかにも細々と岳参りを復活させていた集落があったことも知る。みんな気持ちと同じだったのだ。
宮之浦ではかつてのやり方をほぼ再現し、5月と10月に日帰り登山で宮之浦岳に登る。町が広報するため、島の文化を理解したいと、Iターン者も多く参加する。

シャクナゲの持ち帰りが林野庁に規制されたこともあったが、「島の文化であり、必要以上はいただかない」という中川さんたちの働きかけで、特別に許可が下りた。中川さんは言う。
「岳参りは屋久島の精神性の根幹です。再び廃れることがあっても、つなぐ努力は必要だと思っています。時代に合わせて方法は変わっても、根底にあるものが変わらなければ大丈夫。屋久島の人はいつの時代も山に生かされてきました。山への感謝と謙虚な姿勢をわれわれが忘れない限りは、屋久島の森は守られていくでしょう」
中川さんの話を聞きながら、今の私たちが学べることが多くあると感じた。屋久島に行こうと考えている人たちは、縄文杉だけではない、自然とともに育まれてきた屋久島の生活や文化にも、ぜひ目を向けてみてほしい。
印象的だったのは、取材先で、あるいは飲食店で、出会う人が口々に「屋久島は水の島です」と誇りをもって口にしていたことだ。森が抱える課題は、島外から訪れる私たちと無関係ではない。一人ひとりの意識が、屋久島の豊かな水を守りつづけることにつながる。

(2022年4月18日 22日取材)



28 27



26



25

25「屋久島の緑にいつも元気をもらっています」と話す公認ガイドの飛高章仁さん。地元(大分)と屋久島では自然のスケールが違うそうだ 26「この島にしていると、いい意味で欲がなくなりますよ」と言うダイニングバー経営者で漁師の八峠信幸さん。毎朝サップをするのが日課 27屋久島環境文化財団 事務局長の高良尚男さん。「岳参りこそ屋久島の文化の中心」と力説する 28スポーツ用品店「ナカガワスポーツ」代表の中川正二郎さん。宮之浦集落で岳参りを復活させた。「山への感謝と謙虚な姿勢を忘れてはならない」と話す



【屋久島】

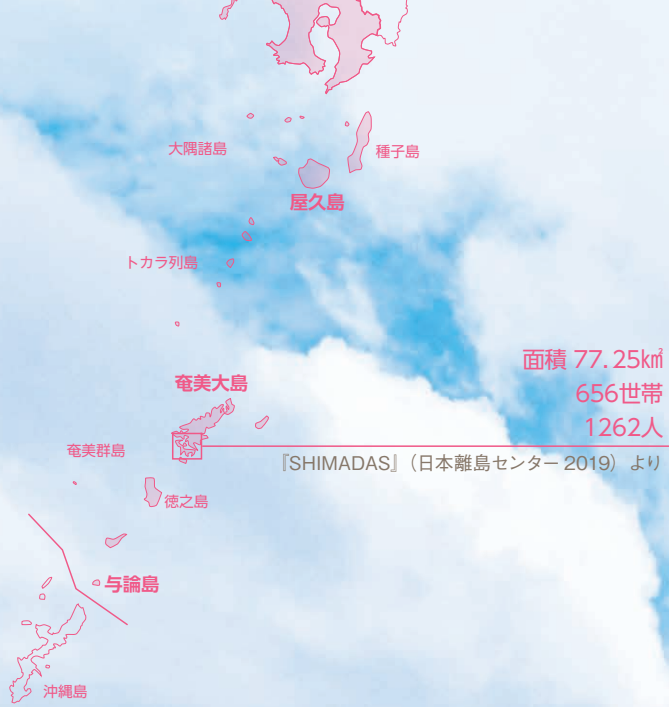


【加計呂麻島】

加計呂麻島

祭祀の痕跡が残る静謐な島 せいひつ

波が穏やかで台風時に避難海域として用いられる大島海峡。「瀬戸内」とも呼ばれるこの海峡を奄美大島南端の古仁屋港から船で渡る。約20分で着く加計呂麻島では、地下水は飲み水に適さないが、山からの表流水を用いて稲作を営み、地形に合わせてサトウキビや芋も栽培し、暮らしつつけてきた。森と海の狭間で、小さな扇状地の限られた空間を巧みに切り分け使いながら生きてきた人びとの集落と水の関係、祭祀の痕跡が残る加計呂麻島を訪ねた。



国土地理院基盤地図情報「鹿児島」をもとに編集部作図



加計呂麻島で最も規模が大きい集落「諸鈍(しよどん)」。およそ80世帯、約130人が扇状地で暮らす



デイゴの大名が見守る「テラミズ」

この島では梅雨時に紅の花をつけるデイゴの並木道が、孤を描く海岸線に沿って数百メートル続く。太い幹から海の方へと、くねくね触手を伸ばすように張り出す枝葉のトンネルを中ほどまで行くと、海そばに一軒の家がある。

奄美群島ならではの主屋（オモト）と台所（トークラ）の二棟形式。

映画『男はつらいよ 寅次郎紅の花』（1995年）のロケで使われた、マドンナのリリーが暮らし、寅さんが居候する家だ。寅さんの映画は48本目の同作が最終作となった。地元でも観光客からも「リリーの家」と親しまれていたこの家も、

空き家となり廃れかけた。しかし2017年（平成29）に宿泊施設としてリノベーションされ、寅さんの思い出とともに今もある。

南東の湾に面したここ「諸鈍」は、奄美大島から大島海峡を渡った加計呂麻島で最大の集落だ。80世帯に130人ほどが暮らす。

集落の村長兼自治会長のような重任を果たすのが区長。諸鈍区長の徳元さんの家も、デイゴ並木の近くの海沿いにある。徳さんに、水道が敷設される以前に使っていた集落の水源を案内してもらった。諸鈍集落は海岸から内陸にかけて金久¹、練²、大田³の4地区に分かれるが、それぞれ共用の水源をもっていた（大田と里で共用）。

加計呂麻島の85%は森林地帯。急峻な山麓のわずかな扇状地に集落が点在し、小川が流れ込む。

リリーの家から内陸へと奥まった、山裾の藪に分け入る。島にはハブがいるから、不用意に道を外れて草むらに入るべからずだが、徳さんの先導なので特別だ。

案内されたのは険しい崖の下。そこには、上から流れてくる水を受けとめるかのように据えられたコンクリートの囲いがあつた。「湧き出しとはちやう。山水やね。みんな『テラミズ』と呼んどつた。

重機もない昔やから手づくり。なかに砂利を敷いて上澄みの水を汲んでたんです」と徳さんは言う。

「昭和三年」の刻字が見える。水流はちよろちよろとしかないが、「命の水」だったころはあふれるくらい溜まっていたそう。徳さんが子どものころの実家はテラミズのそば。

「天秤棒やから揺られて、家に着いたらバケツ半分しか残らない。一日3回くらい汲みに行つてたんちやうかな。それはほとんど子どもの仕事。小遣いもらつて」と徳さんは振り返る。

もっと内陸にある水源も2つ、見せてもらった。1つは今も農業用水に使われている。内陸部でサトウキビや芋、水田を耕作し、海沿いの微高地に家を建てた集落は水源を中心に形成されていったのだ。井戸水の質はあまりよくないため、飲用水や神事で使う水は表流水の共用水源を利用していた。

終戦間際に加計呂麻島へ特攻隊長として赴任した作家の島尾敏雄は、諸鈍集落から10kmほど離れた押角集落のミホと熱烈な恋愛の末に結ばれた。ミホが加計呂麻島で

の思い出を綴つた著作に次のような一節がある。

「私の家には中略二つの井戸がありましたがお茶の水は泉の水でないと美味しくないのですよ」という母の言葉で、毎日泉まで水を汲みに行っていました。（中略）小さな水溜りは清く澄み、泉に映る自分の顔をみつめるだけで清められるようなやさしさを湛えています。（『海辺の生と死』中央公論新社2013）。

この一節からも、加計呂麻島の人びとは井戸よりも表流水の共用水源を頼つていたことが窺える。

共有広場「ミヤ」を中心とした空間構造

加計呂麻島の大きな特徴は、どの集落にも、ほぼ中央に共同で使



ハブ退治の「用心棒」

加計呂麻島西端の美久集落では、10mほどの間隔で道端に、長さ2m弱の青竹や木の枝を立てかけてある。その名も用心棒。ハブを寄せつけず防御するための道具だ。ハブの「捕獲棒」はまた別で、専用の器具がある。奄美群島でハブは奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島に生息。夜間と早朝に活動する。捕獲されたハブは血清をつくるためにも市町村で買い取っている。瀬戸内町の2021年度買い上げ数は2353匹だった。

Column 01



国土地理院基盤地図情報「鹿児島」をもとに編集部作図



諸鈍区長の徳元さん。大阪で働いていたが母親の面倒を見るため、2016年に加計呂麻島へリターン。「あちはせかせかしててね。こっちのはどかいいい」と笑う。下の写真は徳さんの家にある古井戸。かつて生活用水として使っていた

水源1
金久



水源3
大田・里



水源2
繰



1 高台から見た諸鈍集落(金久地区)。手前は川の水を引き込んだ水田エリア。奥は海岸沿いの微高地に建てられた住宅群。ちょっとした高低差を利用して暮らしている 2 諸鈍集落に3つある水源の1つ「テラミズ」。金久(かねく)地区の人たちが使っていた山水。上澄みを飲んでいたという 3 繰(くり)地区の人たちが共用していた水源。井戸のようにも見えるが、斜面上部に石積みがあり、井筒も低すぎることから山水を溜めていたと考えられる 4 大田(おおた)と里(さと)の両地区が共同で使っている水源。沢から直接水をとっている 5 映画『男はつらいよ 寅次郎紅の花』でマドンナのリリーが暮らした「リリーの家」。現在は宿泊施設 6 奄美群島随一と言われる諸鈍のデイゴ並木。沖縄との交易が盛んだったころに航海の目印として植えられたという説も

リリー
の家



デイゴ
並木





で、人の集まる公民館や集会場はすぐにわかり、そこがミヤーであることは、明らかに見てとれる。また、海岸から見える沖合に屹立した岩場は「タチガミ」といい、突き出た岬は山の神が降りる場所とされる。

複雑なりアス海岸沿いの自動車道を巡り、点在する集落を訪ねると、トネヤとアシャゲが現存していた。あたりの景色に溶け込んでいた。その様子が、神事と日常が地続きの島の暮らしを想わせる。

文化が入り混じった 伝統芸能「諸鈍シバヤ」

諸鈍には平家の落人伝説が残る。この島に渡った平資盛一族が始めたと伝えられるのが、国指定重要無形民俗文化財の伝統芸能「諸鈍シバヤ」だ。旧暦9月9日、資盛を祀る大屯神社の境内で、20あつたうちの11演目が上演される。

演目の前に、拍子木やホラ貝などを手に男衆が練り歩く「楽屋入り」での、三味線と太鼓を伴奏に独特の節回しやお囃子が耳について離れない。獅子退治や美女と大蛇の人形芝居などは滑稽で、琉球交易の地だったこの島らしい、大和と琉球の文化が混じったような

楽しい芸能だ。島外からも多くの観客を集めている。そして観客だけでなく、瀬戸内を挟んだ奄美大島に住む加計呂麻島出身者も大勢集まる。普段は静謐な島だが、この日だけは別だ。

諸鈍シバヤの開幕では大屯神社の土俵を掃き清めるが、集落の公民館が建つ広場にも土俵がある。旧暦8月の豊年祭では、相撲と余興が披露され、青年団とともに子どもたちもまわしをつける。

相撲では力士が取組前に口に含む「力水」がつきものだ。神聖な水なので、これもかつては貴重な共用水源からとったのだろう。

循環農法でつくる 昔ながらの純黒糖

丘の上から諸鈍集落を眺めると煙突の煙がたなびいていた。上田製糖工場だ。サトウキビは薩摩藩統治時代から奄美群島の基幹作物。往時からすれば減ったが、加計呂麻島には今も5つの製糖工場がある。サトウキビの栽培に最も重要なのは豊富な水。亜熱帯気候で雨の多い南西諸島は栽培適地だ。

上田製糖工場では、サトウキビの搾り汁を煮詰める工程で灰汁を絶妙の塩梅で取りつつける昔なが

らの手づくりで、無精製の純粋な黒糖を生み出す。釜の燃料はサトウキビの搾り滓。繁殖牛を飼育しており、サトウキビの葉は牛に飼料として与え、搾り滓は牛に踏ませて堆肥にもする。さらにも無駄なない、見事な循環型の農業だ。

「3月から4月に一番糖度が上がる品種のキビだけを使ってるものから、品種によっては収穫が始まる12月には作業しない。そのころはまだ糖度が乗ってないし、時季が遅すぎても糖度が抜けて砂糖にならない。加工糖やザラメ糖を入れれば年間通してつくれるはずけど、それじゃ純な黒糖にはならんのかな」と上田博和さん。

工場ではしか入手でできない「菓子糖」を口に含む。とたんにホロホロと溶け出す。コクのある甘さが広がるが、しつこさは一切ない。

上田製糖工場を含め、島内に5つもの製糖工場があるように、小さな扇状地で限られた水源やその他の資源を大事に使って暮らしてきた加計呂麻島の人びと。もうノ口はいないし、祭祀と水との関係も薄らいでいるが、祭祀の痕跡が集落ごとに見られる、この静かな島には心惹かれるものがある。

(2022年4月26日取材)



【加計呂麻島】



トネヤ



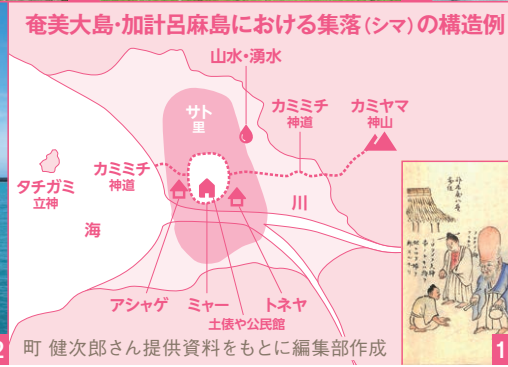
ミヤー



アシャゲ



タチガミ



12



11



カミミチ

10



瀬戸内町立図書館・郷土館学芸員の町 健次郎さん。奄美群島の民俗学が専門で与論島出身

7加計呂麻島の実久(さねく)集落の神の小屋「アシャゲ」8実久集落にある広場「ミヤー」9嘉入(かにゅう)集落にある「トネヤ」10諸鈍集落の「カミチ」(神道)。祭祀のときに神様が通る道 11「南島雑話」に描かれた「山の神」奄美市立奄美博物館蔵 12西阿室集落の「タチガミ」(立神) 13国指定重要無形民俗文化財の伝統芸能「諸鈍シバヤ」が上演される「大屯神社」 14旧暦の9月9日に大屯神社で行なわれる「諸鈍シバヤ」。演目「ククワ節」より 9 12 14提供: 町 健次郎さん



諸鈍シバヤ

14



大屯神社

13



19



17



18



16

15

黒糖

15上田製糖工場が製造・販売するつぶ糖(上)とこな糖(下) 16集落の人に頼まれた分しかつからない「菓子糖」。固めないで圧倒的に柔らかく、そして美味 17諸鈍集落にある上田製糖工場。集落内のサトウキビだけを使って黒糖を製造している 18畑から手作業で切りとって運び込んだサトウキビ 19上田製糖工場の社長を務める上田博和さん

木慈集落の魚垣 提供: 町 健次郎さん



Column 03

石を積んで魚を獲る「魚垣」

遠浅の海岸に石を積み上げ、半月形の長い堤を築くと、満潮時に海水が石積みを超えて流入する。干潮時海水が引いて干潟になった浜に取り残された魚を網や竹籠、素手などで捕獲する。「石干見」という古式漁法だ。奄美、沖縄地方ではかつて数多く行なわれ、海中に石垣のような囲いを築くことから「垣漁」と呼ばれていた。加計呂麻島では集落で共用し、その痕跡の石積みは今も見られる。戦後しばらくまでは現役漁法だったという。

Column 02

奄美のソウルドリンク「ミキ」

加計呂麻島の国指定重要無形民俗文化財の伝統芸能「諸鈍シバヤ」では、集落の婦人会などが協力して「ミキ」をつくり、観客と演者にふるまう。ノロの祭祀や豊年祭で奉納された「神酒」が語源だがアルコール飲料ではない。奄美群島や沖縄で市販され親しまれている乳酸菌飲料で、米とサツマイモを発酵させてつくる。ドロツとした喉ごしは、甘いおかゆ、もしくはノンアルコールの甘酒といった感じ。冷やして飲むと夏バテ防止にいいそうだ。





【与論島】

身も心もほどけるような楽園の水事情

与論島



与論島

面積20.56km² / 2057世帯 / 5327人
 『SHIMADAS』(日本離島センター 2019)より

戦後、沖縄が返還されるまで「日本最南端の島」として人気を博した与論島。泊まる宿が見つからず「廊下でいいから寝かせてくれ」と頼み込む観光客も多く、部屋数に余裕がある家はほぼすべてが民宿の看板を掲げたという。高台からは沖縄島最北端の辺戸岬を望むことができる。島を一周するのに車で1時間程度とコンパクトなサンゴ礁の島の、あまり知られていない水事情と魅力を追った。

与論島東部の大金久(おおがねく)海岸。
 この沖に白い砂浜「百合ヶ浜」が出現する



1 上空から見た与論島。高い山も深い森もなく、周囲約23kmととても小さいが美しい島だ
2 3 最初に与論島へ上陸した人びとが使ったとされる井戸「アマンジョー」。内部はこのようにゴツゴツしている 4 5 城(ぐすく)集落の生活用水として使われていた「屋川(ヤゴー)」。急な階段を下りた先にある洞窟内を水が流れている。半竹状の石樋は与論城築城時につくられたともいわれるが判然としない

大潮の干潮時に現れる 幻の白い砂浜

滞在3日目。ようやく晴れた日に海を見て息を呑んだ。なんという色なのか。エメラルドグリーンとも違う、やや乳白がかった青。近いのはターコイズブルー、あるいは白群か――。

奄美群島でもっとも南に位置する与論島は隆起サンゴ礁の島であり、その海の美しさはつとに知られている。運のいいことに訪れたときはちょうど大潮の時期で、干潮時には幻の砂浜と呼ばれる「百合ヶ浜」が現れるという。「年齢の数だけ星砂を拾えば幸せになれる」と教えてもらったが、とても拾いきれる数ではないのであきらめた。

百合ヶ浜には大金久海岸からグラスボートで渡る。一人3000円也。だがその価値は十分にある。海と白い砂浜、青い空――身も心もほどけていく。

島内の主要な浜のそばにはシャワーを備えた公共トイレがある。泳いだ後に無料でシャワーが使えるのはうれしいが、与論島は量的にも質的にも「水に乏しい島」である。そのことを、ここを訪れる

ほとんどの観光客は知らない。

人びとが水を得た 井戸と地下水

与論島の年降水量の平年値は1798・1mm(1991～2020年)。奄美市名瀬の約2800mm、沖縄県那覇市の約2000mmに比べても少ない。島は小さく、水を蓄えられない。たとえ雨が降っても隆起サンゴ礁の島なので水は抜けてしまうのだ。

ただし、地下に浸透する水がところどころで湧き出している。古来、人びとはそこで水を得ていた。今も残る井戸や地下水

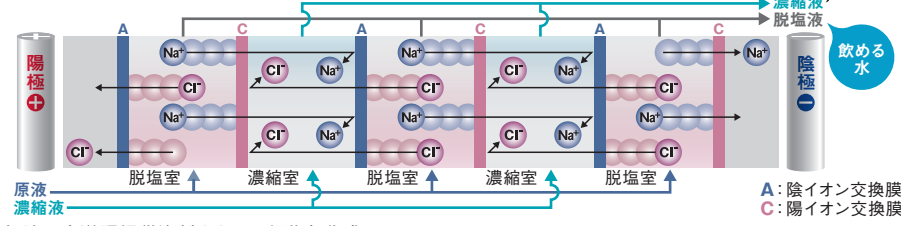
を与論町教育委員会生涯学習課の南勇輔さんに案内してもらおう。与論島へ最初に上陸した人びとが使ったと伝わるのが、赤崎海岸のそばにある井戸「アマンジョー」。付近には緑色岩の露頭がある。「硬い岩に浸透をはばまれた水が出てくるようです」と南さん。すぐそ



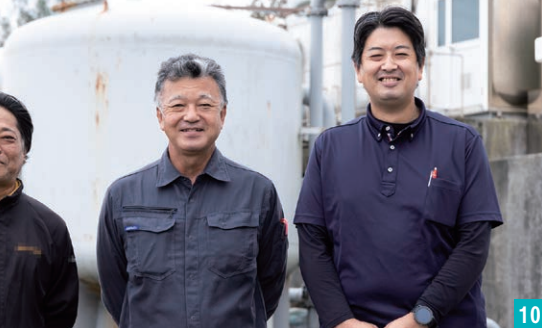
与論町教育委員会生涯学習課の南勇輔さん。町指定天然記念物の「麦屋井(トインジャゴー)」の前で

電気透析イオン交換膜法の原理

イオン交換膜と電気の働きで溶液中のイオン性物質の脱塩・濃縮・精製・回収を行ない、脱塩液は飲料水となり濃縮液は捨てる



与論町水道課提供資料をもとに編集部作成



6 7 海水を淡水に替えて不純物をろ過する電気透析イオン交換膜法を用いた海水淡水化装置。水源の水を集めて屋外の急速ろ過設備で前処理を行ないこの装置を通す。メンテナンスは年に2回。6月と12月に7~8名が2週間かけて洗浄する 8 メンテナンス時や故障時に用いる予備の交換膜(1台)。膜2枚・網2枚の計4枚が1セットで、1台で260セット必要。それが全部で5台ある。膜は1枚5万円とかなり高価 9 海水淡水化施設を備えた古里浄水場。屋外にあるのは急速ろ過設備で奥の建屋に海水淡水化装置がある 10 右から与論町水道課の富永淳さん、仁禮和男さん、浄水場や水源地の管理を担う平田裕之さん

ばには縄文晩期の遺跡が発掘されている。縄文人もアマンジョーの水を使っていたのかもしれない。

もう一つ有名なのが「屋川」。城集落のそばの洞窟にある。石造りの階段を下りていくと琉球石灰岩の台地に浸み込んだ雨が地下水となり滔々と流れていた。手を浸けると冷たい。水を導くための半竹状の石樋が据えられているが、いつ誰がつくったか定かではない。石樋がどこまで続いているのか確かめようと身を屈めて奥に向かうが、体が入らず断念した。

「かん水」を淡水化 硬度も和らげる装置

井戸や地下水、雨水を集めて暮らす島民が待ち望んだ水道(簡易水道)が引かれたのは1964年(昭和39)。しかし、水道水の量と質の問題はその後も付いて回る。

与論島の水道水源はすべて地下水だ。この水は琉球石灰岩に由来するため硬度が高い。健康に影響はないが、石灰分などが析出することでボイラーは詰まり、ヤカンやポットの底に白い塊がこびりつく。観光客が押し寄せる夏場や干ばつ時に地下水を汲み上げすぎるとそこに海水が浸み込み、塩水化

する危険を常にはらんでいた。畑の肥料や家畜の尿、生活雑排水による硝酸態窒素の問題もあった。安心して水を飲みたい——その思いは島民共通だった。およそ10年かけて国や県に働きかけ、2001年(平成13)に稼働したのが「海水淡水化施設」だ。

与論町水道課の仁禮和男さんと富永淳さんに頼んで、海水淡水化施設を備えた古里浄水場を訪ねる。「9カ所の水源からの水を古里浄水場へ導水します。急速ろ過設備で前処理を行なうことから、『電気透析イオン交換膜法』装置で硬度や不純物、窒素分、塩分などを除去し、塩素で消毒した後、配水池へ送水しています」と仁禮さん。

事の発端は、既存の水源では量の確保がややしくなったこと。新たな水源としたのは、既存の水源より質は落ちるものの水量は確保できる、海水と淡水の間くらい塩分を含む「かん水」だった。そこで、既存の水源の水と合わせて電気透析イオン交換膜法で処理して質を高め、配水することに。その結果、かん水は淡水(真水)に、カルシウムやマグネシウムの数値も下がり、硝酸態窒素もある程度除去できるようになった。動力悩みはランニングコスト。動力



12 11



多様だった南の島の かつての文化伝える

として電気代が年間1850万円、薬品代が同1300万円弱。与論町は県内でもっとも水道料金が高い。節水しないと島の人びとに迷惑をかけてしまうことになる。

それはこれまで見たことがない、変わった形の茅葺屋根だった。

昔の民家や民具を残す私設資料館「与論民俗村（以下、民俗村）」には、丸い茅葺屋根の建物が2棟並んでいる。

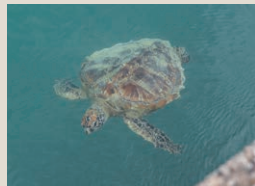
「与論では台風を考えて小さな建物を分けて、しかも低く建てます。また、風切りをよくするため正方形です。本州のような長方形だと一辺が風を多く受けてひっくり返りやすい。屋根材も与論はススキで、お隣のヤンバル（沖縄島北部）は竹。その島がもつ資源や気候、地形に合わせるので、南の島の暮らしにはかつて多様性がありました」

そう話すのは村長の菊 秀史（ひでのり）さん。民俗村の原点は、菊さんの母、千代さんが「これ以上失われたら



漁港に棲みついたウミガメ

ポカンポカンと何頭ものウミガメが呼吸をするために浮上する。ここ茶花漁港にはウミガメが棲みついている。7頭いると言う人もいれば、20頭近くいると話す人もいて正確な数はわからない。ウミガメは漁師が獲物をさばいて放るエラや内臓を食べて育つ。しかし困ったこともある。「スーナ」というゆがくと美味な海藻を食べつくしてしまうのだ。また釣り人はウミガメが現れると魚が釣りづらくなるため、頭を抱える。自然と人の共生は一筋縄ではいかない。



取り戻せない」と島内の民具を集めはじめた昭和30年代後半。捨てようとしていたごみを集めるので、当時は変人扱いされたそうだが、徐々に島民の理解を得て膨大な数の民具が集まった。

菊さんは小学校1、2年生のころ、天秤棒とバケツを持ってアマゾンジョーへ水汲みに通った。この地区に水道が開通する1965年（昭和40）まで日課だった。水をこぼさずを持ち帰るにはコツがある。井戸のそばのソテツや葉が多かった枝をバケツに入れると表面張力が働いてこぼれにくい。

民俗村には雨水を溜める昔のしくみも展示されている。木の幹に捲り束ねた草を巻き、先端は甕に



17 16



15

15 16 茶花漁港に水揚げされた魚と島内の仲買人による競り。前日は荒天予報だったため、通常よりかなり魚が少ない。すべて島内で消費されるという 17 茶花漁港の競りを覗いた日、水揚げが一番多かった阿野（あ）の忠義さん。一度島を出て10年前に戻り漁師となった。与論島には20代、30代の若手漁師が多いと言う

菊 秀史さんの案内で与論民俗村を巡ったとき、天井から吊り下げられた丸い網があった。これは赤ん坊を寝かせるためのゆりかご。菊さんは子ども4人をこれで育てた。鹿児島から北関東あたりはわらで編んだ箱で、東北は丸いわらかごだが、奄美大島から南はハンモック文化だと菊さんは言う。ゆっくり揺らすので赤ん坊の寝つきが良い。奄美大島の名瀬港から与論島の供利港までのフェリーでやけにぐっすり眠れたのは、ハンモックと同じようにゆっくり揺すられたからかもしれない。



11 与論民俗村にある丸い茅葺屋根の建物2棟。与論島は主にススキを用いるが、沖縄島北部は竹 12 与論民俗村に展示されている雨水を溜めるためのしくみ。水に恵まれない島で生きるための知恵と工夫だ 13 ずりりと並んだ甕。与論島の土では甕がつかれないので、大部分は沖縄産。杉など木材のある本州は樽が、木材が乏しい島は甕がそれぞれ発達した 14 与論民俗村を経営する菊秀史さん(右)、妻の友子さん、長男の凧太郎さん。友子さんはイトバショウの繊維を用いる「与論島の芭蕉布製造技術」(国指定重要無形民俗文化財)を秀史さんの母、千代さんから受け継いだ。凧太郎さんは筑波大学大学院で民俗学を専攻して戻ってきた



島内を巡ると、シニアカーに乗ったお年寄りが多いことに気づく。ゆっくり走り、店先を覗き、何か買っては走り出す。与論島ののんびりした雰囲気によく似合う光景だ。裏を返せば乱暴な運転をする人がいないなどシニアカーが走れる生活環境があることを意味する。また、台風が立て続けに来たら物流が2週間止まることもあるので、いざというときに備えて自給自足に近い暮らしが残る。民俗村そ

自給自足の香り残る 与論島の暮らし

突っ込む。幹をつたって落ちる雨を集めるためだ。本来はガジュマルなどの常緑樹にしかける。使い古しのホースを巻くこともあった。菊さんは、家族経営の民俗村で郷土料理、衣服、芸能、住まいなど、この島の文化を伝えつづける。「理想はお客さまが泊まって、海に行つて魚を釣り、芋をつくる。昔話をしながら方言も伝えて……私の代で実現するのは厳しそうなので、子どもや孫に引き継ぎます」



「木の葉みたいなわがよろん 何の楽しみもないところ 好きなあなたがいればこそ いやな与論も好きとなる」

形は木の葉かもしれないが、吹き飛ばような軽さはない。与論島の魅力や楽しみは、美しい海以外にもたくさんある。

(2022年5月1〜4日取材)

ばの漁港で話した二人組の漁師は、家で食べる分の米をつくり、海に出ては魚を獲り、親戚や友人と魚や野菜を融通すると言っていた。最盛期は年間15万人が訪れていた与論島。その後は減少したもののコロナ禍の前はV字回復していた。与論島の海と人懐っこい島の人びとに惹かれ、半年単位で本土と行き来して働き暮らす女性たちがいた。しかも何人もだ。

取材を終え、沖縄島の本部港へ向かうフェリーに乗る。徐々に遠ざかる小さくて平たい島影を甲板から眺めながら、取材中に教えてもらった新民歌『与論小唄』の一節を思い出す。



20



19



18

18 与論島の中心市街地。茶花のまちなみ。のんびり散歩するのにちょうどいい規模。この日は憲法記念日だったため国旗が目立つ 19 市街地を離れるとこうした風景が広がる。険しい山こそないものの起伏は比較的ある。台風被害を抑えるよう建物は低く建てられている 20 供利(ともし)港に接岸したフェリー。空港もあるが物資の運搬という点では今も船の方が重要



【与論島】



【文化をつくる】

編集部

行ってみなければわからない 多様で柔和な島の文化

近いけれど違う 3つの島の水環境

屋久島、加計呂麻島、与論島を巡った今回の取材。3つの島は九州の南から南西方向に伸びる南西諸島あるいは琉球弧と呼ばれる島嶼群に属するが、水をもたらす地形や気象条件を見てもその違いは大きい。

「縄文杉」で知られる屋久島は、作家の林芙美子が小説『浮雲』で「屋久島は月のうち、三十五日は雨といふ位でございますからね……」と登場人物に語るほど雨が多い。中央部に連なる山々に黒潮からの大量の水蒸気がぶつかり斜面を上昇して雲となり雨をもたらす。年間平均降水量は平地で約4500mm、山間部は8000〜1万mmに達する。

加計呂麻島には空港がない。飛行機で行くなら奄美大島北端の奄美空港から南に下り、最南端の古仁屋港から船に乗る。加計呂麻島は雨量こそ多いものの、隣接する奄美大島とは異なり水系にあまり恵まれておらず、人びとは小さな川の扇状地に小

規模な集落をつくった。国土地理院のWebサイト「地理院地図」を見れば、川のあるほぼすべての場所に集落があることがわかるだろう。

与論島は島内の最高高度が97mという平たい島。降水量は比較的少ないうえ、隆起サンゴ礁の島特有の透水性の高い石灰岩質のため、降った雨は地下に浸透してしまふ。島の東側にある古里地区を中心とした地下水を汲み上げて水源とするが、その水は硬度が高く、ポイラー故障や温水洗浄便座のノズル詰まりなどに悩まされている。泊まった旅館では配管故障に備えて軟水器を2台（1台は予備）設置していた。

3つの島は、単に南西諸島というだけで括れない多様さがある。

共通する親しみやすさと しなやかな対応

一方、3つの島には共通点もある。海で隔絶されていて、面積も限られているから、自分たちで工夫して水の質や量を確保している点だ。雨が森を育て、その森の林床が水

分を蓄え、しみ出た水が数えきれないほどの川や滝となって流れ出る屋久島は、水力発電でエネルギー自給を実現。素晴らしいのは、島の人びとが「屋久島は水の島」という意識をもち、登山客の増加で危機に瀕した水源を守ろうと努力している点だ。

地下水の質がよくないうえ、人びとが扇状地の末端で暮らす加計呂麻島の場合、海のそばの井戸では海水が混じりがち。だから山水や湧水を集落が共同で管理し、用いてきた。

与論島の水は硬度が高く、新たに確保した水源が塩分を含むため、急速ろ過設備と電気透析イオン交換膜法で硬度を下げて配水する。コストが嵩み水道代は鹿児島県内で最も高いが、その道を選んだ。

本土のように地続きならば近隣自治体からの融通も期待できるが、島でそれは望めないのが、文明の利器も用いながら水の質と量を確保している。今回は取り上げていないが、水や耕地に限りがあるため、一定の世帯数・人口を超えないようにしてきた島もある。それほど島の暮らしはシビアだ。

にもかかわらず、3つの島でお会いした人たちは皆明るく、親しみやすかった。初対面なのに昔からの知り合いのようにスツと心理的な距離を縮めるのだ。それもごく自然に。その親しみやすさはどこからくるのか。

加計呂麻島と奄美大島を結ぶフェリーで取材中と知った乗組員が最上階の甲板に招いてくれた。レンタカーを電話予約すると「鍵を付けておくれから勝手に乗って行って」と言われる。屋久島で一人旅の女性をよく見かけたのは、たとえ一人でも緊張を強いられる場面が少ないからだろ。コロナ禍で自粛しているが、与論島には遠方からの客を島の酒でもてなす「与論献奉」がある。主人が盃に酒を注ぎ口上を述べて飲み干し、客に盃を回す。受け取った客は口上を述べて酒をいただき、次の人に盃を回す（飲めない人は飲まなくて大丈夫）。それだけでみんな仲よくなっていく。とにかく臨機応変に、こちらが恐縮するくらい親切で柔和に応じてくれる。「欲深くならず満足することができる者は心が富んで豊かである」という意味をもつ老子の言葉「足る



奄美大島の名瀬港そばにある青果店。軒先には島内産のバナナが吊るされ、清見などの柑橘類も並んでいる

互いの文化の尊重が 脱・画一性のヒント

を知る者は富む」が思い浮かぶ。

明治維新以降の日本について「何かこう固い画一性があるような気がしてなりません」（『新編・琉球弧の視点から』朝日新聞社 1992）と述べたのは小説『死の棘』で知られる作家の島尾敏雄。島尾はその画一性から抜け出すためには「日本の中にながら日本の多様性というものを見つけ

ていくより仕方がないのではないかと考え、その可能性を東北と南西諸島、特に後者に強く感じ、ポリネシアやミクロネシアと同じように日本を一つの島々の固まりと捉え「ヤポネシア」という概念を提示した。この島尾の問いに対する一つの回答を、与論民俗村（以下、民俗村）の菊秀史さん（ひでのり）から聞くことができた。

子どもたちを中心に教え伝える活動を続ける菊さんは、小学生のとき教科書に「4月に桜が咲く」とあって違和感を覚えた。奄美、沖縄で桜といえば緋寒桜（ひかんざくら）。与論島では1月に咲く。ウグイスは春の季語とされているが、与論島では11月、12月に鳴く。

巻頭言で町 亞聖さ

んが記してくださいましたように、与論島では「ありがとう」を「とーとうがなし」と言う。菊さんによると民俗村を訪れる人のなかには「それ何語ですか?」と聞く人も。菊さんが「では皆さんが使っている『ありがとう』とはどういう意味ですか?」と切り返すと9割の人は返答に窮するそうだ。

ありがとうとは「有り難し」。有ることが難い、つまり「減多にならぬ」という意味だ。「珍しくて貴重」という意味だ。「共通語とされている言葉を意識せずに使っているながら、島の言葉を変わっている」と言い、桜が1月に咲くのは変だと思う。新幹線や高速道路で『上り』『下り』と呼ぶのも根っこは同じ。中央が進んでいて辺境は遅れている。長年そう刷り込まれたことが、画一的なもの見方となつて、日本のある種の閉塞感につながっているのかもしれない。

インターネット通販がある今、島も昔ほど不便ではないが、台風が来たら外からの供給は途絶える。よそには頼れない、自分たちでなんとかするしかない、困ったときはお互いさま——そういう助け合う暮らしがあるから島を訪ねた初対面の相手にも、お互い人間だ、上も下もないじゃないか、と無意識に接する。それゆえの柔和さなのだろうか。島尾が問うた固い画一性から抜け出すための多様性とは、互いの文化を尊重し合うところから見出せそう。

島の文化を見聞きして 自分の世界を広げる

話が堅苦しくなったが、難しいことを抜きにしても島は楽しい。見るもの聞くものすべて新鮮でわくわくする。それは人間に生来備わっているある種の感性と言えなくもない。

沖縄県本部町にある「海洋文化館」の館内ガイドツアーに参加して知ったのだが、太平洋に散らばる島々に人類が移動したのは二段階あり、最初は3万年から5万年前に移動した人類。その子孫がオーストラリアのアボリジニーやパプア人だ。そして4000年から5000年前に島伝いに移動を始めたのが二段階目。途中、フィジーやサモアで1000年ほど停滞したが、ダブルカヌー（双胴船）や星の配列や動きなどで目的の方向を推測する航海術を編み出し、ハワイ諸島などに到達した。

たしかに南西諸島をフェリーで移動すると、思いのほか島と島が近いことに気づく。奄美大島を出ると徳之島が見えるし、その次は沖永良部島と与論島と順々に見えてくる。地形も大きさも違う島を見ていて「あそこには何があるんだろう」と思う。島伝いに移動した人たちの気持ちが少しだけわかった気がする。

時間を使ってはどうか。茶花漁港の競りを覗いたら、仲買人が「魚が少ないから漁師に発破をかけなきゃ」と船に向かつて走る姿を見ることができたし、魚を仕入れている80歳を過ぎたおばあさんに昔話も聞けた。

南西諸島に限らず近場でもいいから島に行きたい。そこにはむき出しの自然と向き合い、いざというときは自給できるように備え、一人では生きられないのを知っているからこそ他者にも柔和な人びとがいる。都市部に住んでいると忘れてしまうそうした生き方に触れるだけで、自分のなかの何かが変わり、ものの見方や世界が広がると思う。

行っただけではわからないかもしれないが、行ってみなければわからない。そして、自分の住む地域と訪ねた土地の文化を比較して理解するためのテーマの一つとして「水」はお勧めだ。

また、ふだんはどうしても二次情報に触れることが多いけれど、現地に行くことが許される状況になりつつある今、実際に足を運んで、自分の目で見て耳で聞き、人びとと接するなかでその島の文化を体全体で感じ、言葉も含めて敬う気持ちをもちたい。今こそ、島へ。

着陸寸前の飛行機から見た屋久島の風景。人と自然の共生のために設けられたゾーニングが見てとれる



久高島の「おじい」に聞いた 航路開拓と戦後の話



島に戻ったその足で
共同井戸を確かめに

屋久島から加計呂麻島そして与論島と南西諸島を巡った今回の取材には、実は少しだけ続きがある。

与論島から沖繩島（以下、本島）北部へフェリーで渡り、さらに本島の南東に浮かぶ「久高島」へ向かった。12年ごとの午年に行なわれる祭事「イザイホー」（注1）で知られる久高島に会いたい人がいた。久高島と本島の航路を開いた内間新三さん。

1927年（昭和2）生まれの95歳で、久高海運合名会社の会長を務める。内間さんは戦前、八重山諸島でカツオ漁に従事。沖縄戦では防衛隊

（注2）に召集され西海岸へ。戦況の悪化で散り散りになった所属部隊を抜け、砂浜に潜って身を隠し、夜中に足を攣りながら海を泳ぎ、九死に一生を得た。同郷の先輩2人と拾った壊れかけの刳り舟を操って久高島へ戻った内間さんが最初に起こした行動は「共同井戸を見に行く」といった。

「本島で会った人から、一足違いで

(注1) イザイホー
久高島で12年ごとの午年に行なわれる祭事。久高島には30歳以上の全女性が入る村落祭祀組織があり、イザイホーはその組織への加入儀式。過疎化と指導する神役の不在などにより、1978年（昭和53）を最後に行なわれていない。

(注2) 防衛隊
「兵役法」に基づく（現地召集中心の）補助兵力部隊。陣地構築や弾薬・食糧の運搬、夜間の案内などに従事。満17～45歳の男性を対象とし、沖縄戦では2次にわたって召集された。

(注3) 総有
15軒が一組で全十組、150戸に土地を割り振っていた。面積は家族の人数による。3人家族の場合は約300坪、5人家族なら約600坪、5人以上の家族には約1000坪。

母たちは島に戻ったと聞きました。無事ならば共同井戸の水を使っているはず。そう思っただけに、行くに痕跡があったんです。塚を訪ねたら母や親族がいて「助かった！」と大騒ぎでした

生き抜いた約5000人が戦後に久高島へ戻る。家は焼き払われていたので茅葺屋根の仮小屋を建てた。骨組みには米軍支給の建材を用い、屋根は島に生えているガヤ（チガヤ）で葺いた。

ちなみに久高島では個人の土地所有が認められていない。土地は誰のものでもなく島のもの。「総有」（注3）だ。

手づくりの木造船で 本島との航路を開拓

生活が落ち着くと内間さんは「本島との航路開拓」に乗り出す。それまでは若者が漁業用の刳り舟で本島と行き来していたが、どうしても定期船がほしかった。

「戦前に祖父父母が立て続けに亡くなったんです。島には診療所も薬もなく風邪をこじらせて。それが悔し

くてね」

本土から杉の丸太（獣肥杉）と丸太（丸太）が運ばれてきた。寸法を指示して製材させたものを那覇から運んだ。構造材（骨組み）には久高島の木を使った。

「東海岸の枯れ木で曲がっているものを切りました。ヤナブ（テリハボク）という粘りがある強い木です。それを骨組みにして、知り合いの大工と二人で手づくり。動力は米軍払い下げの四気筒ガソリンエンジンです」

その船でしばらくは漁業をしながら無事故を続けた。定期船の許可をもらうため手づくりの木造船を馬天港に持ち込むと検査所の所長に「どこで造船技術を習ったのか？」と聞かれた。戦前のカツオ漁船で覚えた、見よう見まねだから習っていない。そう言ってもなかなか信じてもらえなかった。

井戸は順番待ち 悲願の海底送水

他の多くの離島と同様に、久高島も飲み水には苦労した。雨が降りそうになると大きな木の横に甕を置き、クバの葉を樋のようにして雨水を溜めた。

「雨が降らない日が続くと、井戸水を汲むのが大変でした。1時間に桶が1杯溜まるかどうか。当番の女性は井戸の横に夜通し寝そべって、桶に水が溜まったら先着順で渡しました。そこで当時の村長を「海底水道を引かないと人並みの生活ができない」と口説き、予算をとったのです」

1978年（昭和53）に完成した本島と久高島をつなぐ海底送水管は

延長6400m。「バルブを開くと水がピューッと出た。みんな大喜びでした」と内間さんは頬を緩める。内間さんの母は5人姉妹。全員がノロだったそう。母がイザイホーに参加した1942年（昭和17）の午年。当センターのアドバイザー、鳥越皓之さんの父、憲三郎さんが視察に来ていた。

「鳥越先生はイザイホーを見て『こんな小さな島でこういう儀式があるのはとても珍しい』と言い、『普段着では無礼だから』と白装束に着替えて5日間収録していました。向こう本島で鳥越先生がイザイホーを紹介したので、戦後は人が押し寄せました」

1966年（昭和41）の午年のイザイホーはまさにてんでこ舞い。当時の船は20人乗り。しかも本島側の馬天港とは片道1時間以上、往復3時

間かかる。人が多すぎて船に乗りきれなかった。内間さんは本島側の港を動かすことを画策し、のちに安座真港が開かれた。今はフェリーで25分、高速船なら15分で本島と行き来できる。

沖縄戦を生き抜き、手づくりの木造船で航路を開いた内間さんに、久高島をどんな島にしたいですか、と問うとこう言った。

「自分たちの時代はとうに過ぎました。戦争で生き残ったのは島のために尽くしなさいという神様の思し召しと思っただけにむに働け、島の人たちも今は不自由なく暮らせる。あとは若い人たちに任せます」

内間さんをはじめ無数の先人たちが「みんなに苦労させないように」とつくり上げてきたこの社会を、よりよい形でないでいくにはどうしたらいいのか、考えさせられた。



1 久高海運合名会社会長の内間新三さん。初めてお会いした4年前と変わらず従業員が休みの日は窓口に座り、乗船券を売っている 2 久高島の徳仁港。沖繩島の安座真港との間をフェリーと高速船で結ぶ 3 海岸沿いにある井戸「ヤグルガー」。急な階段を下りた先にあり、この水は今も祭祀で用いられている 4 イザイホーなど主要な年中祭祀の祭場である「御殿庭（うどうんみゃー）」





シードル風の飲みものとなったリンゴの皮の抽出液(右が赤リンゴの皮、左が青リンゴの皮によるもの)

島暮らし「三種の神器」

浦環

五島列島の福江島に一人で住んで、魚と酒を友として大量に消費しています。それだけだと炭水化物が足りないのです、パンに大量の自家製ジャムを盛り上げて毎朝食べています。季節ごとに果物を切り刻んで煮込み、大量のアルコールを加えて仕上げてみると、家中が甘い香りに包まれて、幸せな気分になります。熟睡できます。梅、イチジク、甘夏、八朔、金柑、と島に生えている木から収穫するので、無農薬ですし、ワックスなしです。アルコールは、焼酎、ポルト、ラム、モルトウイスキーなど。アルコールを十分に残して火を止めます。

毎年、12月に秋田の友人から、硬いリンゴを送ってもらいます。昨年は30kgものリンゴをジャム化しました。大量に出る皮を水を加えて煮込み、絞ります。抽出液は、薄いリンゴジュースです。それを2Lのペットボトルに入れ、発酵させました。最初は同じ色だったのですが、青リンゴからは緑色、赤リンゴからはピンク色の「シードル風」へと変わっていきました。飲んでみると、薄い甘さとリンゴらしい味わい、シユワシユワ感がたまりません。しかし、なかなかの色です。何人かの友人に、「飲んでみないか」と勧めたところ、たいていは「先生、勘弁してください」と断られました。勇気ある者たちは、「私は緑のが好きです」とか「いけますねえ」とか、「家のなかに漂っている菌がよいのではないのでしょうか」とかの感想をもらいました。下痢することもありません。万歳。

水は、福江島中央にそびえる七ツ岳の麓の湧水を使っています。二週に一度、30Lを汲みに行きます。水・果物・菌の三種の神器がそろえば豊かな生活ができます。ありがとうございます。



Tamaki Ura

一般社団法人ラ・ブロンジェ 深海工学会 代表理事。東京大学名誉教授。1977年東京大学大学院工学系研究科船舶工学専攻博士課程修了。工学博士。東京大学の講師、助教授を経て1997年に教授。2019年から五島列島に住む。著書に『大型タンカーの海難救助論』(成山堂書店)『五島列島沖合に海没処分された潜水艦24艦の全貌』(鳥影社)などがある。

地球温暖化・気候危機 気候崩壊を論じる(上)

水問題と直結する地球温暖化

地球温暖化とは、人間活動を通じて排出される温室効果ガスによって地球が温暖化し、異常気象にかかわる気候の激化や海面上昇が人類や生物にさまざまな深刻な影響を与える地球規模の環境問題である。地球温暖化は水問題とも直結している。

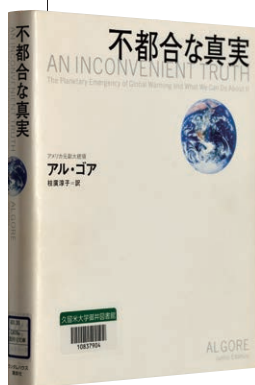
2021年(令和3)、地球温暖化に関して、2つのトピックスが話題を呼んだ。

12月、米国プリンストン大学上席研究員の真鍋淑郎さんは、気候変動の予測研究においてコンピュータによる計算で、大気中に二酸化炭素が増えつづけると地表の気温が上昇することを明確に実証した功績で、ノーベル物理学賞を受賞した。さながら邦夫編『地球温暖化は阻止できるかー京都会議検証』(藤原書店・1998)には、真鍋淑郎氏のインタビューが収められている。

同年10月にはイギリス・グラスゴーで開催されたCOP26(国連気候変動枠組条約第26回締約国会議)では、世界の平均気温上昇を産業革命前に比べて1.5℃以内に抑える努力を追求することが示された。2050年ごろには世界全体の温室効果ガスの排出量を実質ゼロにすることが明示され、足並みがそろって来た。地球温暖化について追ってみたい。

不都合な真実

私が地球温暖化の問題を意識しはじめたのは、アル・ゴア著『不都合な真実―地球温暖化の危機』(ランダムハウス講談社・2007)の書と映画上映によってである。アル・ゴアは指摘する。今、私たちが直面している問題とは、人間が膨大な量の二酸化炭素やその他の温室効果ガスを排出していることから、この大気の薄い層がだんだん厚くなり、厚くなるにつれ本来ならば大気を抜けて宇宙へ出ていくはずの赤外線



放射の多くを逃さなくなる。その結果、地球の大気や海洋の温度は危険なほど上昇しつつあり、世界的に自然災害が起こっている。このことを気候危機、気候崩壊という。

二酸化炭素は温室効果ガス排出量全体の約80%を占める。家庭や自動車、工場などで石油・石炭・天然ガスの化石燃料を利用することによって、また、森林の伐採やセメントを製造したりすると、大気中に二酸化炭素が排出される。産業革命前、二酸化炭素濃度は約280ppmだったのが、2005年(平成17)では二酸化炭素濃度は381ppmになっていた。

その結果、1970年代に比べてキリマンジャロの雪と氷河が激減。1997年(平成9)米国グレイシャー氷河が減少、2001年(平成13)スイス・チェルバ氷河の減少などを映し出す。海水温が上がると暴風雨の勢力が強まる。2004年(平成16)フロリダは4つのハリケーンに襲われる。2005年(平成17)夏、ハリケーンがカリブ海とメキシコ湾を襲った。さらに世界的に大洪水や山火事の災害も増加した。

アル・ゴアは前作の10年後に『不都合な真実2』(実業之日本社・2017)を発表した。彼は、地球温暖化を防ぐために多くの国々を訪れ同志を募り、活動を続けた。化石燃料業界からの「人々を混乱させ現実的ではない」との主張に対してもめげずに、破局的な災害を防ぐために私たちは変わらなくてはならない、私たちは変わることができる、私たちは変わるという信念を貫いた。

地球のことを考えながら食物のことも考えている。食物の栽培、加工、輸送、廃棄にかかわる電力、輸送、農業分野からの排出量も大きな役割を占める。肉を食べる量を減らし、地元産を買うよう、買い物や外食をするときも、農業とその副産物を考えるべきである。さらに土地開発に伴う森林伐採につながる食糧を買うことが必要だと指摘する。



古賀 邦雄

こが くにお

古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団(現・独立行政法人水資源機構)に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

地球温暖化の探究

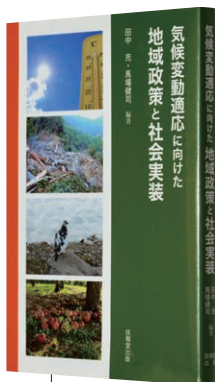
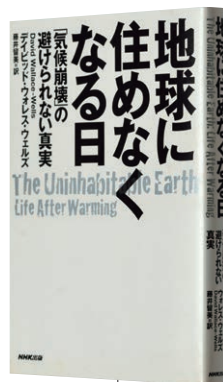
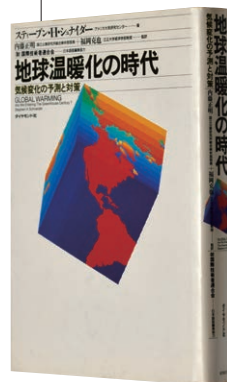
地球温暖化をどう捉えたらいいのだろうか。独立行政法人（現・国立研究開発法人）国立環境研究所地球環境研究センター編著『地球温暖化の事典』（丸善出版・2014）は、地球温暖化に関する基本的かつ重要な事項をできるだけ網羅的に系統立てて解説する。

①気候変化の将来予測、②温室効果ガス（二酸化炭素・メタン・亜酸化窒素・ハロカーボン・エアロゾル）、③地球システム（気象と気候・大気圏・水圏・地球の熱収支・大気海洋大循環・モンスーン）、④気候変化の予測と解析（社会経済・排出システム・大気海洋結合気候モデル・地球システムモデル・予測される気温変化）、⑤地球表層環境の温暖化影響（水循環・海面上昇・海洋酸性化・極端現象）、⑥生物圏の温暖化影響（温暖化と生物多様性・温暖化と外来生物・海洋生物）、⑦人間社会の温暖化影響と適応（水資源・利用・農業・水産業・健康障害）、⑧緩和策（需要と供給対策・非CO₂・森林減少の防止・中長期温暖化対策）、⑨条約・法律・インベントリ（気候変動枠組条約・条約国会議・地球温暖化対策の推進に関する法律・排出源・吸収源・排出主体の排出量）、⑩持続可能な社会に向けて（持続可能な発展の取り組み・低炭素社会と循環型社会・生物多様性と社会）という内容となっている。

日本気象学会地球環境問題委員会編『地球温暖化—そのメカニズムと不確実性』（朝倉書店・2014）の内容は、①問題の背景と本書の目的、②地球温暖化に関する観測事実、③温室効果と放射強制力、④産業革命以降の気候変動の検出と要因分析、⑤気候の予測とその不確実性、⑥気温・降水・大気大循環の変化、⑦日本周辺の気候の変化、⑧温暖化で起こる地球表層の変化、⑨海面水位上昇、⑩長い時間スケールの気候変化、となっている。地球温暖化が顕在化しはじめた今日、そのなかで暮らすわれわれが現象を正しく理解するための書である。

鬼頭昭雄著『異常気象と地球温暖化—未来に何が待っているか』（岩波新書・2015）は、人類が経験したことがないような暖かい世界に向かって進んでいると説く。温暖化は徐々に起こる災害で、手遅れにならない対策をとる必要性を強調する。小西雅子著『地球温暖化を解決したい—エネルギーをどう選ぶ？』（岩波書店・2021）では、エネルギーの働きは仕事する力（ものを動かす力）のことで、熱を出す、光を出す、動かすことであって、この過程で多くの化石燃料を利用することによって二酸化炭素を排出する。すべてのエネルギーの長所と短所をあぶりだし、経済的に安全性を持った、ベストミックスエネルギーを考える。また、同著『地球温暖化は解決できるのか—パリ協定から未来へ！』（岩波ジュニア新書・2016）もある。

ステイブン・H・シュナイダー著『地球温暖化の時代—気候変化の予測と対策』（ダイヤモンド社・1990）は、この書が発行されて30年を経ているが、温室効果のメカニズムを解明し、それが地球の気候と社会に及ぼす影響を検証し、そして直ちに着手すべき温暖化対策を論



じる。1990年代以降は温暖化問題をめぐって国際政治や経済が動くことになるだろうと指摘していたが、まさしく今日2020年代は世界的にそのような動きになってきた。

そのほか、矢沢潔著『地球温暖化は本当か？—宇宙から眺めた地球の話と、私たちにできること』（扶桑社新書・2021）、宇佐美誠著『気候崩壊—次世代とともに考える』（岩波書店・2021）がある。

地球温暖化がもたらす水災害の激甚化

地球温暖化の影響と思われる、さまざまな異常気象災害が起こっている。船瀬俊介著『温暖化の衝撃』（三一書房・1997）では、食糧パニック、大干ばつ、熱波襲来、ヒートアイランド、森林火災、北極・南極氷河の減少、海面上昇、生物の異変、暴風雨の襲来、大洪水、大寒波、猛吹雪、冷夏について、きめ細やかに追っている。

マッティン・ヘッドベリ著『世界の天変地異』（日経ナショナルジオグラフィック社・2021）によると、2005年（平成17）米国フロリダ州をハリケーン「カトリナ」が、2013年（平成25）米国オクラホマ州を「ムーア竜巻」が、2017年（平成29）パキスタンを熱波が襲った。2018年から2019年にかけてオーストラリアを大洪水が襲った。

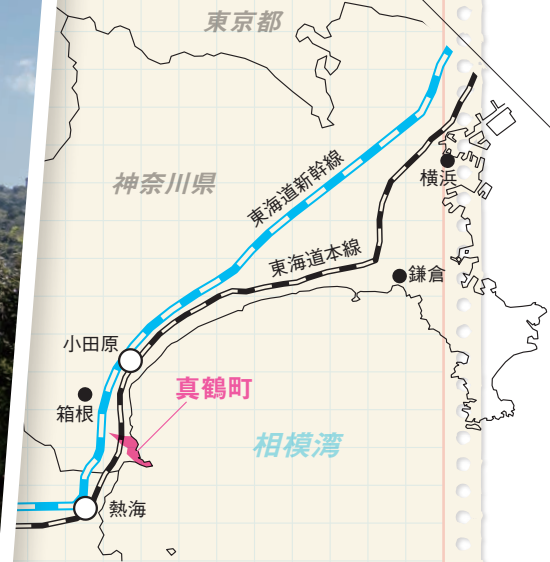
デイビッド・ウォレス・ウェルズ著『地球に住めなくなる日』（NHK出版・2020）では、日本を含むアジアの大部分が居住不可能になる、4℃上昇で北極圏にヤシの木が生える、2050年までに気候難民が10億人となるなど気候崩壊の戦慄の未来を予想する。ゲルノット・ワグナー／マッティン・ワイツマン共著『気候変動クライシス』（東洋経済新報社・2016）は、文明と環境の破壊にどう向き合うかを経済学者が追究する。また、気候変動で激変する地球を描くクリスティーナ・コンクリン／マリーナ・プサロス共著『地図から消える土地』（扶桑社・2022）は、海面が上昇し、海水が酸性化し、河口地帯は洪水に見舞われ、多様な生物が絶滅するという。

タイム誌編集部編『地球温暖化』（緑書房・2009）は、TIME誌の写真でわかる地球温暖化問題とその解決法を論じる。食糧のトウモロコシを燃料にする。電球を電球形蛍光灯に変える。照明にLED、すなわち発光ダイオードを使用する。地熱を利用する。社員の通勤時間を短縮する。バスに乗る。オンライン決済にする。窓を開ける。グリーン電力を買う。肉食を減らす。マイバッグを使用する。地元の農家をサポートする。樹・竹を植える。ネクタイを外す。コンピュータの電源を切る。終業時間には明かりを消す。消費を減らし、分かち合い、無駄なく暮らす。これらのことは、日常の生活のなかで可能なことである。田中充・馬場健司編著『気候変動適応に向けた地域政策と社会実装』（扶桑社出版・2021）では、地方自治体の政策を追究する。



真鶴

みず・ひと・まちの未来モデル 2022
真鶴編 第1回



「みず・ひと・まちの未来モデル」
2年目の研究対象地域となる
神奈川県の実鶴町。高台から
真鶴港を望む

首都圏の「過疎のまち」になぜ 若い移住者が増えているのか？

若者が移り住む
神奈川のみなとまち

神奈川県足柄下郡真鶴町。相模湾に突きでた半島にある小さなみなとまちである。

真鶴町は、北に小田原市、西に湯河原町に面し、周囲には箱根や熱海といったメジャーな観光地にも囲まれている。それらに比べると素朴で生活感のある海辺の景観に驚かれるかもしれない。

けれども、私たちが注目したいのは、素朴でありながらも美しさを感じられる生活景観に若者たちが惹かれて移り住むようになってきていることである。真鶴町の人口は6940人(2022年5月1日時点)だが、2019年度(令和元)には転入・転出による人口の社会増減がはじめて増加に転じた。

真鶴町は神奈川県で最も高齢化率が高く、県下で唯一の過疎法(注1)に基づく「過疎地域」とされる。

にもかかわらず、なぜ若い移住者が急増しているのだろうか。移住者には既存のコミュニティに溶け込む努力がみられ、まち全体が活気を帯びているようだ。私が真鶴を訪れたのは6年ほど前であるが、そのときとは見違えるような印象

(注1) 過疎法
過疎地域自立促進特別措置法の略。人口減少率、高齢者や若年者の比率などの要件を満たした市町村に対して特別措置を講じ、福祉の向上や雇用拡大などを旨とする法律。



野田岳仁

法政大学
現代福祉学部 准教授

Takehito Noda

1981年岐阜県関市生まれ。2015年3月早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士(人間科学)。2019年4月より現職。専門は社会学(環境社会学・地域社会学・観光社会学)。

地

域が抱える水とコミュニティにかかわる課題を、若者たちがワークショップやフィールドワークを通じて議論し、その解決策を提案する研究活動「みず・ひと・まちの未来モデル」。

2年目となる2022年度は、数多ある候補地のなかから神奈川県「真鶴町」を研究対象地域に選びました。

この研究活動のかじ取り役は、法政大学現代福祉学部准教授の野田岳仁さん。初年度とは異なるメンバー(野田さんの指導を受けるゼミ生「新3年生」12名、ミツカンの若手社員3名)で研究活動に取り組みます。

真鶴町の面積は7・05km²。神奈川県内で2番目に小さいけれど、海に面した風光明媚なまちです。まちづくりに携わる人びとの間で、真鶴町は「美の条例」で広く知られています。

今号は真鶴町の概要と歴史的なバックボーン、研究の方向性などについて、野田さんに記していただきます。



を持つ。

「みず・ひと・まちの未来モデル」の2年目はこの小さなみなとまちが舞台となる。今回は、なぜ真鶴町をフィールドにするのか、その理由とともに、そこで考えられるテーマについて述べていきたい。

真鶴町の弱点としての水問題

「真鶴」という町の名は、まちづくりに関心のある方ならば、一度は聞いたことがあるかもしれない。リゾート開発に列島が揺れたバブル時代に逆らって「美の条例」(1993年)という先進的なまちづくり条例を制定したことでよく知られた自治体だからである。

開発圧力が強かった時代になぜそれに抗うような決断が下せたのだろうか。あまり知られていないことだが、その出発点は真鶴町が抱える水の問題にあった。

真鶴町には安定した水源がない。唯一の河川とされる岩沢川も「水無川」と呼ばれるほど水量に乏しい。1975年(昭和50)の神奈川県温泉研究所の地下水調査によれば、真鶴半島には水道水源として利用できる地下水は存在しないと報告されている(注2)。すなわち、

真鶴町には全町民の暮らしをまかなえるだけの自主水源をもっていないのだ。

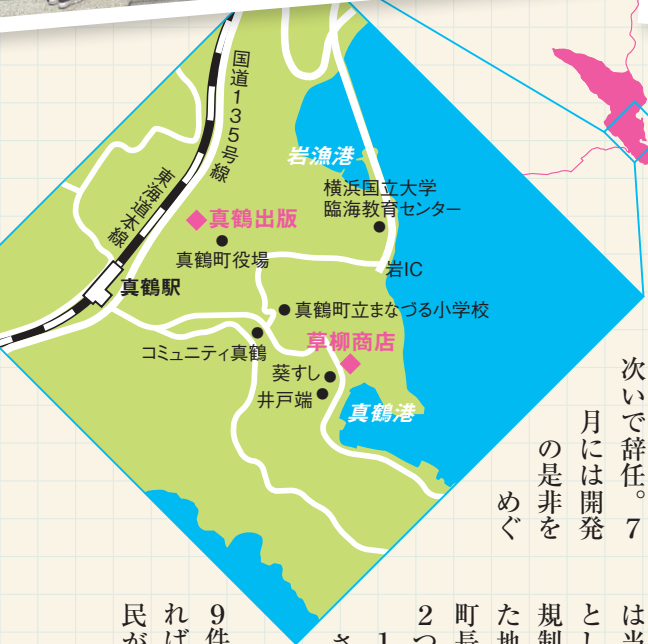
それだけに水の確保には苦勞し続けてきた。1928年(昭和3)に町の水道事業が開始された当初は多量の地下水が湧出していた海岸沿いの磯崎水源を利用していたが、地下水の塩水化が懸念される。実際に当時の水源から供給される水道水は塩っぱいもので、飲めたものではなかったそうだが、ご飯を炊くと塩気があつてちようどよかつたそうである。

そこで、1960年(昭和35)に小田原市との境(小田原市江之浦地区)に水源を設けた。しかし、翌年に建設中の新幹線六郷山トンネル工事で落盤事故が発生し、水が枯れてしまった。落盤事故の現場では大量の湧水が流れだしており、それを新たな水源としたものの、全町民分をまかなえるものではなかった。

自主水源は2000トンに過ぎず、湯河原町から3000トン、小田原市内の水源から3000トンを調達した。1日最大8000トン確保できたのは1980年代に入ってからである(注3)(その結果、町の水道料金は県内でも最高額であり、湯河原町の2・3倍近い水準にある)。当時の人

(注2)

小鷹滋郎・平野富雄(1976)「真鶴町における地下水調査孔の掘さく」『神奈川県温泉研究所報告』7(3)



真鶴町

口は約9500人。町の試算によれば、最大1万1000人がまかなえる計算であった。

当時は真鶴町も例外ではなく強力な開発圧力がかかっていた。1988年(昭和63)に真鶴町ではじめて7階建ての大型マンションが建設されると、即日完売で翌日には1000万円のプレミアムがついたという。それ以降、役場には次々と開発計画が押し寄せる異常事態となった。

当時、開発に対する許認可権を握っていたのは神奈川県などの特定行政庁であり、住民と議会が開発に反対しても町にできることは限られていた(注4)。1990年平成25月に町の開発規制権限に限界を感じた助役、町長が相次いで辞任。7月には開発の是非をめく

って激しい町長選となり、開発抑制派の三木邦之氏が当選する。

三木町長は選挙公約に掲げた「水の条例」の制定に乗りだし、9月には「真鶴町上水道事業給水規制条例」と「地下水採取の規制に関する条例」が議会の全会一致で制定された。

弱点を強みに転換させた「美の条例」

「真鶴町上水道事業給水規制条例」は、20区画以上の宅地開発や20戸以上の共同住宅、収容能力が100人以上の宿泊施設などについて新たに給水しないことを定めたシンプルなものだ。

町から給水を得られない事業者は当然井戸から水を汲み上げようとした。そこで、「地下水採取の規制に関する条例」で動力を用いた地下水の採取する施設の設置を町長の許可制とした。水の条例は2つセットで効力を発揮した。

1988年以降、町に開発申請された47案件は共同住宅が20件1033戸、宅地分譲13件181戸、ホテル保養所9件535室などで、これらを認めれば町には新たに4000人の住民が増えることが想定された(注

5)。ともすれば、先の町営水道の最大供給量8000トン/日を優に超えてしまう。平常時には余裕があるとされた供給量も1987年(昭和62)の異常渇水時には14時間の断水が発生していた。これではとても町民の暮らしが成り立たない。町は町民の生活保全のために、なんとしても開発をコントロールする必要があったのである。

ところが、この水の条例は危うい条例でもあった。類似の手法をとっていた武蔵野市では水を止められた事業者から訴えられ、水を止めるのは水道法上の「正当の理由」に当たらないとして自治体側の完敗となっていたからである。当時は訴えられれば負ける可能性がないわけではなかった(その後1999年の福岡県志免町給水拒否事件最高裁判例では新たな見解がみられる)(注6)。

水の条例はたしかに開発を一時的に沈静化させることにはなったが、開発圧力に向き合いながら、どのようなまちをつくるべきか、そのための体系的なまちづくりのルールをどう定めるのかに向き合う必要がある、「美の条例」と呼ばれる「真鶴町まちづくり条例」の制定に至る。

「真鶴町まちづくり条例」は次の点で画期的な条例である。いわゆ

(注4) 桜井良治(1996)「真鶴町のリゾート開発規制条例と自治体の都市計画権限」『静岡大学経済研究』1(1)

(注3・注5) 五十嵐敬喜・野口和雄・池上修一(1996)『美の条例—いきづく町をつくる』学芸出版社



真鶴町を初めて訪れた野田ゼミの学生たち。JR真鶴駅に集合し、真鶴町観光協会のガイドの案内でまちなかを歩いた



「美の条例」と呼ばれる「真鶴町まちづくり条例」を制定した真鶴町役場（上）と「美の条例」について説明する真鶴町政策推進課のTsubouchi Naoyaさん（下）

る土地利用規制基準といった定量的基準だけでなく、定性的基準となる「美の基準」を具現化するための8の「美の原則」と69の「キーワード」で景観形成のルールを定めていることだ。加えて、開発行為の手続きの規定を明確化し、住民参加の手続きを設けている。「美の条例」は、定性的基準であるがゆえに抽象的で行政対応には馴染みにくいものである。指導や対応における公平性の確保や恣意性の排除といった行政的な作法と抽象的なルールをどのように折り合いをつけるのか、職員には難しい問いが突きつけられた。

「美の条例」の運用の最前線で丁寧^①に事業者と向き合いながら、最適解をみつけた「対話型協議」という独自の手法を確立したのは、町役場の政策推進課のTsubouchi Naoyaさんである（注7）。

大阪出身のTsubouchi Naoyaさんは都心の大学に通う学生時代に「美の条例」に出会い、画期的な条例によるまちづくりに惹かれて町役場に奉職

された。自身も移住者であり、地元住民と移住者をつなげる試みを公私にわたって展開されている。

今回初めて真鶴を歩いた学生たちが感動したのは、その景観だけでなく、人びとのつながりの強さや豊かさにある。

思い切ったいい方をすれば、基本的に開発行為はそこにある物理的な空間（景観）の破壊だけでなく、そこで機能していた社会関係を分断させる行為といえる。人びとが集う小さな商店がチェーン店に塗り替えられていく様は近代化の名のもとに各地でみられた光景である。結果的にそれを「美の条例」で抑制しながら、さらに創発的に関係性を醸成させている部分もあるろう。

海沿いや山間に大型のリゾート施設が乱立する熱海や箱根とは異なり、素朴でありながらも美しさ

「美の条例」がもたらしたもの

を感じられる生活景観が人びとを惹きつけるのは、「美の条例」とそれを誇りに日々まちづくりに取り組んできた行政職員や地元住民のみなさんの日常の暮らしの積み重ねによるものである。

このような取り組みの成果として、ここ数年で周囲のメジャーな観光地も顔負けするほどの注目を集めるようになってきたのだ。この30年で世の中の価値観も変わり、さらにコロナ禍がそれを加速させ

① 真鶴出版が2021年に発行した「真鶴生活景」。町内に住む山田将志さんが真鶴の生活風景を描いた画集
② 「泊まれる出版社」真鶴出版の入口。古民家をリノベーションし、素敵な空間に仕上げた
③ 出版事業とゲストハウス運営を行なう真鶴出版の川口瞬さんと住友美さん夫妻



(注7) Tsubouchi Naoya (2008) 「『美の基準』が生み出すもの」『季刊まちづくり』18

(注6) 宮崎淳 (1999) 「給水契約の締結拒否についての正当性」『創価法学』29 (1/2)

ているかのようだ。

観光の現場でも、3密の典型である大衆的な観光地ではなく、地域の豊かな自然や生活文化に焦点をあてる「暮らし観光(注8)」に注目が集まるなど価値転換が起きつつある。

それらの流れの重なりあいのなかで、真鶴町に移住者呼び込むことにつながっているのである。

「美の条例」と 若い移住者の増加

その移住者の入口となっているのは、「泊まれる出版社」として知られる真鶴出版である。

川口瞬さんと来住友美さん夫妻により、出版事業とゲストハウス運営が行われている。興味深いのは運営をはじめた当初は外国人旅行者が多かったというが、次第に移住希望者が宿泊するようになったことだ。

川口さん来住さん夫妻も移住者であり、町がはじめた移住施策「お試し暮らし」企画の移住者第一号でもある。

いまでは真鶴出版を通じて、なんと26組もの若い世代が移住しはじめている。真鶴出版では宿泊客に対して、まち歩きを行っている

ふらりと入った鮎店で聞いた話

真鶴という名は、半島の形が羽根を広げた鶴に似ていることに由来します。その半島の山側や海岸から切り出された石材「小松石」は鎌倉時代から広く使われ、江戸城の石垣にも用いられました。真鶴は湊を備えた採石場というよそにはない利点があり、船を使って搬出できたそうです。

ふらりと入った地魚の鮎店「葵すし」で真鶴の石材業と漁業の関係について興味深い話を聞きました。真鶴ではよそから来た人同士が結婚して住み着くケースが多かったそうです。石材業に携わるのは東北の次男、三男が多い一方、真鶴は漁業も盛んなため紀州から海女さんが来るし、干物加工の仕事を求めてくる女性も多かった。そして小さなまちですから移住者同士が知り合って結ばれるというわけです。「ここで結婚する人が多くて。だから出身地はかなりバラバラなんですよ」

そう教えてくれたのは、「葵すし」のおかみ、高橋昭子さん。今、真鶴町に若い人たちが移り住んでいるのは、ひよっとしたら「よそ者を拒まない」真鶴の風土が心地よいのかも知れません。

ちなみに夫の衛さんは真鶴町の出身ですが、昭子さんは1956年(昭和31)に真鶴町と合併した岩村の出身。「真鶴と岩では氣質がちょっと違うのよ」と二人は笑っていました。(編集部)



4 草柳商店では買ったお酒を店内で飲む「角打ち」ができる。しげさん、あーちゃんと話している間に何人もの住民が訪れた 5 草柳商店の外観 6 しげさんに案内してもらった旅館「井戸端」。今は使われていないが大きな井戸跡がある。かつてはここで人びとが集まって井戸端会議をしていたのだろう



草柳商店店主の草柳重成さん(しげさん)と母親の草柳文江さん(あーちゃん)



ことも注目される。

そのまち歩きで必ず連れて行かれるのは、「観光案内所」ならぬ「関係案内所(注9)」として知られる草柳商店である。店主の「しげさん」こと草柳重成さんとしげさんの母親である「あーちゃん」と草柳文江さんがなんともチャームングで訪れる人を惹きつける。私が真鶴に通いはじめた理由のひとつもあーちゃんやしげさんをはじめとした真鶴の人に会いたくなくなるからだ。観光名所でなく、人に会いに行く観光は「暮らし観光」の肝とされる。

草柳商店では店内で買ったお酒をそこで飲む「角打ち」ができ、地元の漁師や住民のたまり場である。そこに、移住者や観光客がやってきて、他愛のない話をしながらお互いを知り合っていく。

あーちゃんはいまでは若い移住者の「社会的なオヤ(注10)」のような役割を担っているようにもみえる。

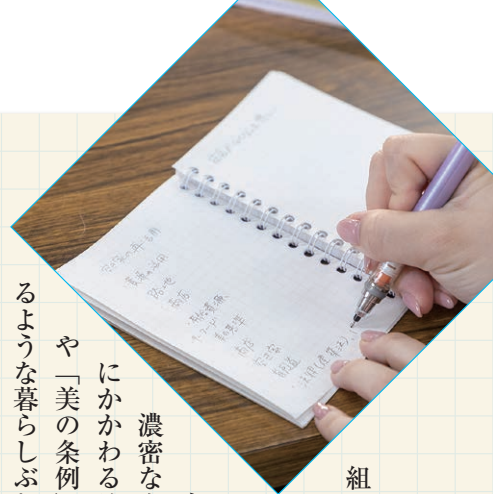
来住さんからは「美の条例」は人にも適用されていると思う」という言葉もあった。そうなのである。移住政策というのと、いかに移住者に選ばれる地域を目指すかという発想になりがちである。それに対して真鶴町では、その逆で結果的に地域が移住者を選ぶような仕

(注9) 関係案内所

人と人の関係を案内したり、生み出す空間や場所を指す。「ソトコト」編集長の指出一正さんが提唱している。

(注8) 暮らし観光

「内発的な観光」のいち形態。これまでも暮らしに焦点をあてた観光は各地でみられるが、近年では写真家のMOTOKOさんの呼びかけで若い世代の取り組みが広がりつつある。



組みになって

いるような
気がする
のである。

真鶴町には

濃密な人付き合い
にかかわる地域の作法
や「美の条例」で謳われ
るような暮らしぶりの根底に
フィルターのようなものが存在

しているように感じられる。それ
がある種の移住者選別機能を果た
しているのかもしれないのだ。

地域にとって移住者というのは、
地域の担い手として期待された存
在である。けれども、ともすれば、
地域の秩序を乱す攪乱要因でもあ
るとされる。どのように地域に馴
染んでもらい、コミュニティの成
員として人間関係をつくってもら
えるかが過疎地域の政策的な課題
となっているのだが、真鶴町では
地域にうまく溶け込ませるような
社会的な仕掛けが意図的にもそう
でなくとも豊富にちりばめられて
いるように感じられる。

その社会的な仕掛けを明ら
かにできれば、政策的
な応用も可能かもしれ
ない。これらのこと
も私たちのテーマとなりうる
だろう。



真鶴町を巡った後、「コミュニ
ティ真鶴」に集まり感想など述
べ合う野田ゼミの学生たち



未来モデルの 根底にある「水」

ここまでみてきたように、真鶴
町における「美の条例」制定に至
る過程からわかるのは、水不足か
ら町民の生活を守る手段として、
「美の条例」をつくったというこ
とである。

これは地域経営やまちづくりの
視点からも示唆的であろう。当た
り前のようだが、地域の水の供給
量によって、まちのあり方が規定
されることを改めて気づかせてく
れる。真鶴町の持続可能な未来モ
デルの根底にあるのは、「水」なの
である。

その結果、大衆的な観光地には
ない美しい生活景観が残った。
「美の条例」とは、水不足という
町の弱点を強みに転換させる方法

なのであった。

制定から30年を経て、美しい生
活景観や人に会いに行く「暮らし
観光」が注目され、若い世代の移
住にも結びつくようになってい
る。

なぜこのような好循環がめぐつ
ているのだろうか。今回のプロジェ
クトは、この問いになんらかのか
たちで応答するものになるだろう。
真鶴は都心から100kmの距離

にある。コロナ禍であっても学生
たちと何度でも通うことができる。
それゆえ、現段階での早急なテー
マの絞り込みをあえて避けている。
私たちは現場と大学の往復を繰
り返しながら真鶴の地で深みのあ
る研究を目指していくことになる
う。

(2022年4月9日取材)

(注10) 社会的なオヤ

生みのオヤとは別に地域のルールや暮らしの作法を教えるなど地域で面倒をみてる存在のこと。じっさいにあーちゃんはある移住者を息子のように思っただけでいい。

戸惑いのなかから 何を見出すのか？

事前に資料を読み、仮説もある程度立てて初め
て真鶴を訪ねたゼミ生たち。午前中は観光協会の
案内でまちを歩き、午後は3つのグループに分か
れ、気になる場所を巡ったり地元住民に話を聞く
など、各々が自由に動きまわりました。

そして夕方近くに再集合、真鶴で心に残った人や
風景、今後取り組みたい課題などをみんなで振り
返りました。

もともと住んでいた旧住民と最近移り住んできた
新住民の間で、なんらかの軋轢や問題があるの
ではないかと考えていたゼミ生たちの仮説は崩れ
たようです。あーちゃん、しげさんの人柄に惹かれ
つつも、研究活動の視点をどこに定めたらよいか
若干戸惑っている様子がかがえしました。

ゴールデンウィーク中、自主的に2回目の真鶴訪
問を行なったゼミ生たちもいたそうです。彼ら彼女
らがどんな視点で研究していくのか、これから目
が離せません。(編集部)



真鶴港から見た町の景色。来訪者を迎える人びとの
温かさと素朴なまちなみの美しさが印象的だ

強毒が極上の珍味に変わる

ふぐの子 ぬか漬け



北前船で栄えた 加賀藩の湊まち

石川県には強毒とされるふぐの卵巣をぬか漬けにした郷土料理がある。白山市美川を中心、金沢市金石、大野地区のみに製法が伝わる「ふぐの子ぬか漬け」だ。通常は食用が禁止されているふぐの卵巣を食品加工している地域は、全国でも珍しい。

美川は、一級河川・手取川の河口周辺に広がる静かな港まちだ。白山連峰を源とした伏流水が豊富で、あちこちに湧水の水汲み場がある。

「この近辺は、かつて三津七湊(注)の一つに数えられた本吉湊です。江戸時代から明治初期に北前船の寄港地として栄えました」と白山市水産振興課長の神谷信行さん。北前船は水の補給が不可欠であり、美川の豊かな水を求めて船が集まったのではないかと語る。

美川には、冬の貴重なたんぱく源として、イワシやサバなど魚の塩漬けをぬか漬けにして発酵させる保存食が古くからあった。なかでもふぐの身のぬか漬けは味がよく珍重され加賀藩にも献上されていた。一方、いつからふぐの卵巣をぬか漬けにして食べていたかは定かでないが、170年ほど前には北前船が佐渡から積んだふぐの卵巣を、ここ美川にだけおろしていたという記録が残っている。

発酵の過程で 毒が消え風味が増す

1830年(天保元)創業の株式会社あら与は、ふぐの子をはじめ伝統的な魚のぬか漬けを製造販売する老舗だ。七代目社長の荒木敏明さんに

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、毒をもつふぐの卵巣を無毒化して食す「ふぐの子ぬか漬け」です。



加工場を案内してもらった。仕入れたばかりの新鮮なごまぶぐの腹を開くと、ぽつてりと大きな真子(卵巣)が出てくる。「そもそもはふぐの身が目的で、卵巣は副産物でした。これを捨てるのは忍びない、食用にできないかと先人たちが知恵を絞ってふぐの子のぬか漬けを編み出したのだと思います」と荒木さんは語る。

取り出した卵巣は、加工場内に引いた伏流水で洗って塩水に漬け、そのまま1年貯蔵する。この工程で卵巣から水分とともに毒素が抜け出る。次に、塩漬けの卵巣を水でよく洗い、ぬかこうじで杉樽に本漬けする。空気に触れないよう毎日イワシの魚醤を樽の縁から注ぎ込み、1年半から2年の間、蔵で発酵させる。塩漬けとぬか漬け、合わせて3年ほどゆっくり時間をかけると不思議なことに人体に無害なレベルにまで毒が消え、「奇跡の発酵食」とも称される極上の珍味ができあがる。

なぜ長い年月の発酵によって無毒化するのか、そのメカニズムはまだ解明されていない。

伝統の製法を守りつつ 新たな食べ方も提案

1983年(昭和58)、毒のあるふ

ぐの内臓はすべて破棄するよう通達があった。ふぐの子ぬか漬け存亡の危機に、美川の製造業者は連名で県に陳情書を提出し、いかに重要な伝統食であるか訴え、石川県でのみふぐの子ぬか漬けの製造が認められることになった。ただし安全性を確保するため、製造できるのは認可を受けた業者に限り、伝統の製法を決して変えないこと、出荷前に必ず毒性検査を受けることなどが義務づけられた。

美川のまちを歩いていると、「昔、おじいさんが家でふぐの子のぬか漬けをつくっていた」と話す女性や弁当に、ふぐの子ぬか漬けが当たり前のように入っていたそうだ。あら与は、代々継承してきた製法を守りつつ、パスタやお菓子などふぐの子ぬか漬けの新たな食べ方も提案する。「伝統産業を守りながら次につないでいくためには、時代に合わせて変わっていくことも必要」と荒木さんは言う。

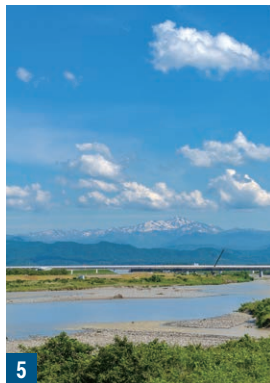
毎年5月の第3土・日曜日に、美川最大の行事「おかえり祭り」が行なわれる。内外から祭りに集まる客人には、どの家もふぐの子ぬか漬けをふるまう。美川の人々にとって、今も地元の誇りの味だ。

(2022年5月26〜27日取材)



ふぐの子ぬか漬けの製造手順

- 1 ごまぶぐの腹を開いて、身と卵巣を分離する
- 2 卵巣を水洗いして、塩分30%の塩水に1年ほど漬けこむ。漬け汁に毒素が徐々に染み出し、卵巣は水分が抜けて堅く引き締まってくる
- 3 1年間塩漬けした卵巣を伏流水で洗い、ぬか、こうじと交互に杉樽に詰め、縁に縄を一周させて木蓋をする
- 4 空気に触れないよう毎日イワシの魚醤を注ぎ足しながら、1年半〜2年ほど発酵させて毒を抜く



1手取川の河口にある美川港。近年は砂の堆積による河口閉塞に悩まされている 2あら与の加工場にある湧水。白山を源とする手取川の河口域では、地下水が湧き出る 3白山市水産振興課長の神谷信行さん。地元・美川で生まれ育った 4ふぐの子ぬか漬けなどを製造・販売するあら与の七代目社長、荒木敏明さん 5手取川の左岸から見た白山連峰。白山と手取川由来の豊かな水がなければ、ふぐの子ぬか漬けはつくれない

取材協力：株式会社あら与
石川県白山市美川北町ル61
Tel.076-278-3370
<https://arayo.co.jp/>

(注)三津七湊

室町時代末に成立した日本最古の海商法規集『廻船式目』に記されている十の大港。





市民がつくった 心地よい空間あふれる 矢作川

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部が全国の二級河川「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載。坂本さんが「初恋の川」と公言する「矢作川」を巡りました。



夕霞 頬も赤らむ 矢作川

みなさんは初恋って覚えていますか？ 特に理由があるわけでもなく、ただただ心が訴えかけてくる「好き」という感情。思い出すだけで胸が苦しくなってしまう人も多いのではないのでしょうか。私

にもあるのです、初恋。もう頭から焼きついて離れない、思い出すだけでもう一度会いたくなるあの人、いや、あの「川」。

今回は私の初恋の川「矢作川」やはぎがわを紹介します。

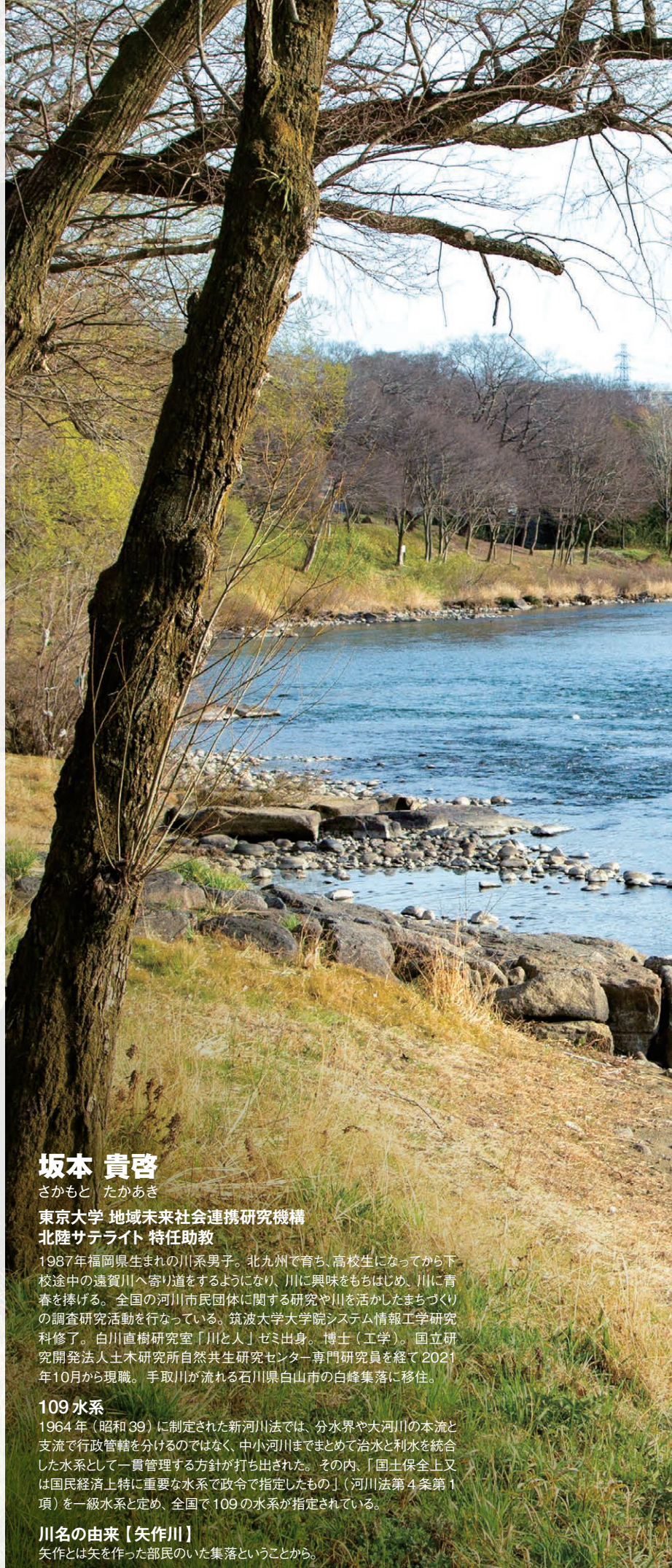
初恋の川の記憶 (坂本少年の回想)

この川との出会いは遡ること高校3年生の7月(2005年)。当時、できたばかりの地元の遠賀川水辺

館に通って高校生のグループで川活動をしていた坂本少年は水辺館のおばちゃんたちに、「川づくりの全国大会(川の日ワークショップ)に矢作川が愛知県であるから高校生たちで発表してきなさい」と送り出された。

ちようど愛・地球博の年だったこともあり、万博に行ってみただけで遠くへ行くという不安を織り交ぜながら、夜行バスは走った。

矢作川中流域にある古岸水辺公園周辺。水制工など人の手が入っていてこの美しさがある



坂本 貴啓

さかもと たかあき

東京大学 地域未来社会連携研究機構
北陸サテライト 特任助教

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士(工学)。国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター専門研究員を経て2021年10月から現職。手取川が流れる石川県白山市の白峰集落に移住。

109水系

1964年(昭和39)に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

川名の由来【矢作川】

矢作とは矢を作った部民のいた集落ということから。



2



4

3



1

ふっそ 古巣水辺公園

現地に着いてからは地元の人で、がんばっていることを発表し、夕方からは懇親会に参加。懇親会場はなんと川沿いで、立ち並ぶ露店でご飯を食べてから川沿いの石の上に乗って遊んでいた。その際に、坂本少年は思わずため息のでる光景を目にした。川岸に生える木々、川に映る夕日、川のなかで釣りをしている人、川沿いに集う全国からの参加者たち。何がいかうまく言い

表せないが、ほんとうに美しい。理由もなく美しい。ふるさとの川しか知らなかったけど、初めてみた川にこんなにも感動することがあるのだと、そう思わずにはいられなかった。初めて川に恋するといふ感覚を知った遠くの川の名前は「矢作川」——。

地方を回る時、ふと、そういえば、鮮明に刻まれているあの時のあの川のある場所はどこだったのだろうかと頭をよぎった。川の名前くらいしか意識してなかったのだから、当時撮影した1枚の写真から情報を集め（中流域、左岸側、河畔林がある、河畔公園）、地図と照らし合わせ、なんとか探し当て、再びあの場所に辿りつくことができた。久々の初恋の場は、変わらず美しかった。



矢作川

水系番号	: 52	
都道府県	: 愛知県・岐阜県・長野県	
源流	: 大川入山 (1908 m)	
河口	: 三河湾	
本川流路延長	: 118 km	39位 / 109
支川数	: 94 河川	41位 / 109
流域面積	: 1830 km ²	35位 / 109
流域耕地面積率	: 7.5 %	69位 / 109
流域年平均降水量	: 1653.5 mm	68位 / 109
基本高水流量	: 8100 m ³ /s	38位 / 109
河口換算の基本高水流量*	: 10931 m ³ /s	31位 / 109
流域内人口	: 74万4942人	19位 / 109
流域人口密度	: 407人 / km ²	18位 / 109

【矢作川流域の地図】

国土交通省国土数値情報「河川データ(平成20年)、流域界データ(昭和52年)、行政区域(令和3)、鉄道データ(令和2年)、高速道路時系列データ(令和2年)」より編集部で作図

(基本高水流量観測地点: 岩津(河口から29.2km地点))
 ※河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量÷基準点の集水面積)
 ※各水系の比較のため公式発表諸元をもとに坂本貴啓さん作成データ出典: 『河川便覧 2002』(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面) 流域内人口 = 国土交通省「一級水系における流域等の面積、総人口、一般資産額等について(流域)」を参照(最終閲覧日2013年4月)



東海道新幹線沿いにある矢作川の看板。車窓から読めるように文字が巨大

枝下用水



人がかかわり続ける川は美しい

この場所の名前が「古単水辺公園」であることを知ったのは大学院生になってからのことです。後に知りましたが、この場所は土木学会デザイン賞を受賞しており、技術的・デザインのにも高い評価を受けている。何の情報も知らず、ここが好きと思えた当時の高校生が直観力は侮れません。

この居心地のよい場所の誕生は1976年（昭和51）に遡ります。この地域の住民だった村山志郎さんが川沿いの竹やぶを切り開くところからはじまります。村山さんは1976年から15年間にわたり、竹やぶを切り開き整備しつづけてきました。だんだんと人の集う快適な空間になっていったことから、それを見ていた対岸の人たちも川沿いの空間整備を始め、その下流もという具合に、豊田市内の矢作川各所に広がっていきました。

この草の根活動と同様に河川行政も動いていきました。この場所が日本初となる近自然河川工法を導入した水際整備が行なわれます。人と自然の距離感が近い川づくりの最新知見をもっていたスイス・ドイツに視察団を送り、それを古

単水辺公園に持ち帰り、水際に多様な流れを生み出す、自然石を用いた水制工を施工しました。30年以上経った今でも機能しており、アユ釣りの人が集う良好な瀬淵も形成されています。

また、工事直後はいい河川空間を形成していても、事業が終わると維持管理がなされず、荒れ放題の場になってしまいうことも多くあります。しかし、事業前後変わらずなく、普遍的に草刈りなどの維持管理活動を行なってきた水辺愛護会の活動により、40年来変わらぬ快適な空間を維持しています。草刈り一つとっても、あえて草を残し、多様な環境を残し、生きものが利用しやすいことまで考えており、優れた技術も持っています。

人がかかわり続けることで、川の空間がこれほど美しい空間になることを実感できる場所でもあります。これが私の心を揺さぶった初恋の正体です。

変わらぬ愛着は世代を超えて

人がかかわり続けることは川への深い愛着の表れともいえます。

西広瀬小学校では、46年間、矢作川の透視度調査を連日行なっています。矢作川を水源とする明治

時代に開削された枝下用水資料室の代表を務める遠志保さんによると、この調査、累積日数は1万6700日を超えていて、西広瀬小学校の児童たちが地域の人たちの応援のもと行なっています。46年前の当時の小学生も今ではお父さんやお母さん。その子どもが変わらぬ方法で透視度を測り続けています。毎日川の小さな変化に気づく人がいるということは川の異変も素早く察知でき、矢作川が美しさを損なっていないか常に確認できます。

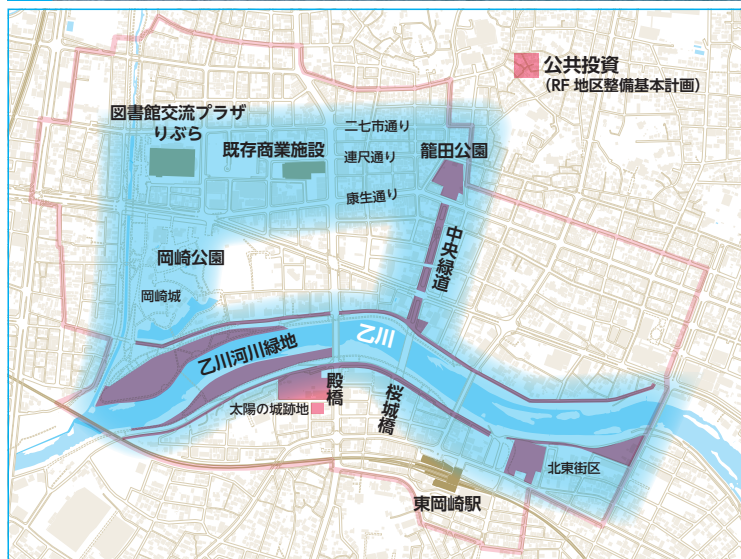
世代を超えて矢作川への変わらぬ愛着が受け継がれています。

近づきやすい都市の水辺へ

私が矢作川が好きな理由の一つとして支流の乙川おとがわも欠かせません。

矢作川の支流の乙川を東岡崎駅から岡崎城の方面を歩くと、川に人が集い、夜には明かりが灯り、時間の変化も含め親しまれています。乙川は全国有数のリバーナイトマーケットの場になっていて、河川敷は水辺を楽しむ人で賑わいます。賑わった人はまちへとあふれ出し、街も賑わっていきます。この川とまちを一体化したまちづくりの戦略を推進しようと奮闘し

1 きれいに整備された古単水辺公園 2 水制工の上に立って記憶をたどる坂本さん(右)とアユ釣りをきっかけにこの河岸の藪を一人で切り開いた村山志郎さん(左) 3 古単水辺公園愛護会の会長を務める村山志郎さん(左)と副会長の村山智英さん(右) 4 河岸の草はすべて刈り取らずとところどころ伸びたまま残してある。生きものの多様性を残す工夫 5 矢作川右岸にある枝下用水の旧取水口 6 水位が低い日に訪問したため、廃線路から枝下旧水路の石堤が見えた 7 枝下用水資料室の代表を務める遠志保さん 8 この廃線路の奥には枝下用水の「第二樋門」の遺構があるという 9 豊田市立西広瀬小学校に掲示されている水質測定の累積日数 10 西広瀬小学校内にある「清流の塔」。ここで透視度を測っている。この日の透視度は75cm 9、10 提供：遠志保さん



岡崎市役所提供資料および国土地理院基盤地図情報「愛知」をもとに編集部作成

ているのが岡崎市です。全国各地と同様に、人口減少、税収減、歳出増大、魅力の希薄化など公共は都市経営の課題に直面しています。周辺の資産価値を高めて税収増を目指すという明確な目標を掲げています。

岡崎市の中心街にQの字で回遊動線を設定し、エリアの約50%を占める公共空間（河川、公園、道路、公共施設など）を活用して、新たな価値を生み出すために、民間事業者にまちの暮らしを豊かにする経済活動などを行なってもらう「公民連携」が進められています。岡崎市役所の中川健太さんは「QRUWA戦略」発足当初より担当

し、庁内や民間事業者などとの調整に奮闘してきました。

また、公民連携の一環で乙川の公共空間を活用してきたのがおとがワ！活用実行委員会（現在ON RIVERとして活動）です。ナイトマーケットは、2016年（平成28）より行なわれた河川活用の社会実験「おとがワ！ンダーランド」の一環として始まりました。同委員会の事務局長を務めた天野裕^{ゆたか}さんは、当初は認知度も低く集客に苦戦したものの徐々に水辺活用策が定着し、今では数十人から数千人規模までさまざまなプログラムが毎週のように開催されるようになったと言います。そのほか日常的な水

辺の利用も増えた一方で、まさに近づきやすい都市の水辺が生まれたいという願いが込められています。

川の改変の苦難を一緒に乗り越えて

矢作川に魅了されて活動をしている人は多くいます。その証拠に、矢作川には上流・中流・下流それぞれに活動している人たちのネットワーク組織があります。矢作川流域懇談会という組織は山部会^{やまべ}川部会、海部会と流域内それぞれに矢作川への愛着をもって活動しています。

元愛知県の職員で古巣水辺公園の水制工づくりにかかわった近藤



11 矢作川の支流である乙川
12 13 SUPをはじめとする水上アクティビティ、ヨガ「おとがワサンデーヨガ」など多彩なプログラムを通じて乙川に人が集まる 提供：ONE RIVER 14 乙川を舞台に公民連携に取り組む岡崎市都市施設課 QURUWA戦略係の中川健太さん(右)とNPO法人岡崎まち育てセンターの事業企画マネージャーの天野 裕(ゆたか)さん(左)

スナスナ美人の矢作川

瞬間的な一目惚れという初恋の一つでしょう。川を見て直観的に美しいと思う風景がそれぞれにあるのではないのでしょうか。

私の場合、矢作川が最初でしたが、無意識にときどき美しいと思う川に出くわします。何か根拠をもって感じたことはなかったですが、ある時、好きな川が何川なのか、全国川旅を語り合った師匠と話したことがあります。聞いた師匠は「それにしてもさかもつちゃん、砂河川好きやな」ということで盛り上がりました。本誌65号pp.38-41参照

川底に砂が積もり、スナスナしている川はさらに川底が反射してほんとうに美しいです。無意識に初恋相手と類似した川を好きと思えていたということで、ブレないその一途さうだけは自身を誉めてあげたいです。



流域活動

朗さんは「理由はうまく説明できないがそういう風土・気風があったからだ」と言います。

私は矢作川流域がこのような風土・気風を醸成できた理由の一つに、川の大きな変化が原動力になっているのではないかと思っています。

矢作川流域は、1960年代、高度経済成長期に、山砂利採取に



15 矢作川の水が導水されている児ノ口公園(ちごのくちこうえん)。子どもから大人まで遊べる自然公園として1991年に豊田市がリニューアルした 16 児ノ口公園の芝生広場。このほか水田や池などもある 17 矢作川研究所の支援で地域住民がワークショップを重ねて改修した支流・岩本川。滞筋(みおすじ)を蛇行させ、子どもが遊べるように降り口をつくるなど、小さな工夫でここまで魅力的な空間になる 18 愛知・川の会の事務局長、近藤朗さん。県庁に勤めていたときに矢作川(古単水辺公園)の治水整備に携わった。今は流域のさまざまな人や団体をつなぐ役割を担っている 19 国土交通省豊橋河川事務所の酒井佳治さん(右)と佐藤嘉紀さん(左)。2022年3月末まで矢作川流域懇談会の事務局を務めていた 20 豊田市矢作川研究所の洲崎燈子さん(右)と吉橋久美子さん(左)



よる濁水被害が発生しました。これに対し、流域住民が環境運動を展開します。通常、環境運動は問題の行為が行なわれている現地の住民が起すことが多いですが、山砂利採取は上流の問題だけにどまらず、流域全域に影響を及ぼしたことから流域が団結する素地がここでつくられたのではないでしょう。

流域全体の環境運動の後、川をどのように使っていくか、それぞれのステークホルダーが合意形成を行ない、「矢作川方式」という環境規制に関する紳士協定が成立しました。

最初は反対運動で始まった活動がやがて時代を経て流域連携へと発展していき、矢作川流域各地へ「いい川づくり」の風土が根づいたのではないかと思えてきます。

矢作川流域圏懇談会の事務局を務める国土交通省豊橋河川事務所の酒井佳治さん、佐藤嘉紀さんは、「この流域の連携はこれからの時代の流域治水を推進する際にも活躍するはず」と期待を膨らませています。

市民と行政をつなぐ役割

市民がつくりあげてきた矢作川ですが、川の未来像を描く市民と河川管理の目的に沿って淡々と河川改修を行っていく行政との間を受け持つ仲立ちの役割も重要です。矢作川流域には、豊田市矢作川研究所という研究所があります。日本で唯一、市町村が設置する川の研究所で、矢作川を通じて生態・人文・工学と多岐のアプリケーションから川と人の営みを研究してい

ます。矢作川はステークホルダーが多いため、合意形成も複雑ですが、「学」が中間支援の立場に立つことで円滑な合意を実現しています。

研究所の職員である洲崎燈子さんと吉橋久美子さんは研究者として河川の対象を研究するだけでなく、市民と行政が議論する現場で両方の想いや根拠を整理する重要な役割を担っています。

市民参加が川を美しくする

矢作川は直観的にも美しいです。同行した編集部の人たちも「たしかに、初恋と言いたくなる気持ちがある」と言われるほどです。行ってみるとそう思う人が多いと思います。

美しさには川そのものの地質や河道のかたちなど本来兼ね備えている美しさもありますが、それだけではありません。人がかかわって川を管理するからこそ、川と人の営みが調和した風景になり、深みある美しさを醸し出しています。直観的に美しいと思ったことには、きっと深い理由があります。そういう目で川を視ていくと新たな発見があるかもしれません。

(2022年3月21〜23日取材)

展示会

「第4回アジア・太平洋水サミット」に出展

「水に感謝し、水の大切さを伝える」活動を熊本から世界に発信！

ミツカン水の文化センターは、2022年4月23日(土)、24日(日)に熊本市で開催された「第4回アジア・太平洋水サミット」の現地展示会ブースに出展しました。

ブースでは「水に感謝し、水の大切さを伝える」という当センターの活動内容を、2021年～2022年に発行した機関誌『水の文化』の特集を例に、壁面全体を使って紹介しました。

来場者からは「なぜ水サミットにミツカンが出展しているのかと思ったが、説明を聞いてよくわかった」「20年以上も活動を続けていることがすばらしい。もっと多くの人に知らせてほしい」「機関誌を職場で読んでいたが、ミツカンの活動とは知らなかった」などの声をいただきました。来場者に加えて、他の出展者とも交流を深める

ことができ、充実した2日間となりました。

現地展示会のブースデザインにあたり写真をご提供いただいた皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今後も当センターは、ミツカングループが「水」の恩恵を受け、「水」によって育てられてきたことへの感謝を忘れず、未来へ向けて「水」の大切さを伝えることによって、「人と社会と地球の健康」の実現に貢献してまいります。



「第4回アジア・太平洋水サミット」の現地展示会ブースで来場者に説明するセンタースタッフ



現地展示会のブースデザイン

機関誌「水の文化」連載「Go! Go! 109水系」



ライン館で自習する大学生たち(左)。白峰集落に溶け込んでいる坂本貴啓さん(右)

機関誌『水の文化』の連載「Go! Go! 109水系」でおなじみの坂本貴啓さん。2021年10月から東京大学 地域未来社会連携研究機構の特任助教として「北陸サテライト」(石川県白山市)に着任。調査・研究活動はもちろんのこと、さまざまな人や団体を巻き込んだかわまちづくりやワークショップなどに取り組んでいます。

連載「食の風土記」の取材後、編集部は坂本さんが暮らす白峰集落に向かい、築100年超の古民家を活用した北陸サテライト「ライン館」を訪問。このネーミングは、明治時代初期にドイツから来日して

白山信仰をはじめとする当地の自然・文化を調査した地理学者、ヨハネス・ユストゥス・ライン博士にちなんだものだそうです。

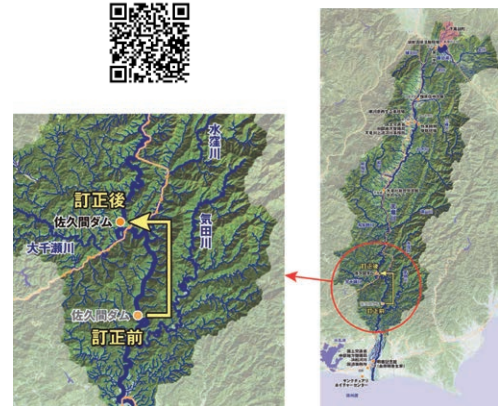
坂本さんはライン館を開放して、地元の人たちと情報交換する「ライン館茶話会」、白峰集落を舞台とする卒論に取り組む大学生たちとの「ライン館ゼミ」などオープンサテライト化を推進。また、白山麓にある国土交通省や環境省、林野庁などの国機関に白山市、区長会などが加わり、交流や連携を深める「ライン会議」にも取り組んでいます。坂本さんの今後の活躍に期待しています。

機関誌『水の文化』52号に関する訂正とお詫び

『水の文化』52号の記事に誤記がありましたのでお知らせいたします。

p45「天竜川流域の地図」における佐久間ダムの位置誤) 秋葉ダムを佐久間ダムとして記載
正) 佐久間ダムを正しい位置(上流側)に移動

すでにお手元に届いている読者の皆さまに訂正してお詫びいたします。ホームページには訂正した地図を掲載しておりますので、正しい地図は以下のリンクよりご確認くださいませと幸いです。



機関誌『水の文化』制作について

ミツカン水の文化センターで発行しております機関誌『水の文化』71号につきましては、感染防止対策を徹底して取材活動を行ないました。また、取材先の皆さまには、顔写真撮影に関してマスクを外していただくなどのご協力をお願いしました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。72号以降も感染防止対策を徹底したうえで、機関誌『水の文化』を制作してまいります。

南西諸島のお土産をプレゼント!

取材で巡った南西諸島のお土産を抽選で6名の読者に差し上げます。当センターHPの「お問い合わせ」からご応募ください。ご希望の商品番号と送付先住所を最下部の「お問い合わせ内容」にご記入ください。



3名

①屋久杉の箸&箸置き



3名

②大島紬のキーリング

ホームページ問い合わせ欄

<https://www.mizu.gr.jp/customer/group/mizu.html>



皆さまからの感想、
情報をお待ちしています!

『水の文化』71号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://www.mizu.gr.jp/form71.html>

アンケート用紙をお持ちの方は
下記へご返信ください。

FAX: 03 (6784) 3056

アンケートから「食の風土記」取材決定!

70号のアンケートでは皆さまよりさまざまな情報をお寄せいただきました。その情報をもとに72号の連載「食の風土記」では「えご」を取材する予定です。お楽しみに!さらなる情報提供もお待ちしております。

※ご意見は71号のアンケートよりお寄せください。右記の二次元コードからアクセスできます

- ・新潟県の中・上越地方～長野県北部を中心に「えご」という海藻を行事の際などに加工して食べる習慣があります。ぜひ取材してください
- ・琵琶湖周辺「水の国近江」の郷土料理「鮎ずし、鴨鍋、鯖そうめん」の特集紹介を!
- ・数年前、三次のワニ料理を初めて食べて感動!そこでいただいた鮎寿司も美味でしたので取り上げてください

〈アンケートより一部抜粋〉

編集後記

今回の取材で初めて訪れた屋久島。間近で見た「紀元杉」の凛とした佇まいに、言葉を失いました。自然に対する畏敬の念は、人が自然と持続的に共生していく上での原動力にもなると感じました。今後も、取材現場にはできるだけ足を運びたいと思います。自身が直接体感したこと踏まえて、読者の皆様に「読んで良かった」と思ってもらえるような「水の文化」を、お届けしていきたいと思えます。(中)

総論の中で「足るを知る」という言葉が出てきた。島の文化・暮らし・歴史を垣間見る中で、「現状に満足する」という表面的な意味ではない、力強い「しぶとさ」を感じた。島の守るべきよい部分を認識し、祭祀や移住者・テクノロジー等、活用できるものをどんどん使い、島の生活を維持・改善しようという知恵を絞っている。「足るを知る」からこそ、挑戦の精神が生まれるのかもしれない。(松)

20年ほど前に訪れた与論島。百合ヶ浜で星の砂を拾った事を思い出した。当時は水に特に関心もなく節水意識も低かったため、日本はどこでも水が豊富にあると思込んでいた。島の貴重な水を我々観光客は使わせていただいていたのだなあと、今さらながら感謝。あの美しい海にまたいつか行きたい。こんどは島の歴史をもう少し勉強してから。(飯)

母が久米島の出身で、小学校の夏休みに家族で旅行したときのこと。はての浜」という砂浜だけの島に行く機会があった。眼前に迫ってくるその姿は絶景で、子ども心にワクワクしたが、ほどなくして思い知る。日差しを遮るものがない。従兄弟に「地元の人は海ではTシャツを着て泳ぐよ」と言われたのを思い出した。当時の、美しさと過酷さのギャップを体感した記憶は鮮明に覚えている。(刀)

観光シーズンは与論島で働いて、オフシーズンは本土に帰って別の仕事をするとという女性たちに出会った。何に心惹かれるのか尋ねると「人と海」。即答だった。たしかに3つの島で会った人たちは誰もが初対面でも構えず親戚のように接してくれた。船が来ない日が続いても協力して生き残る。それが当然という島での暮らしが柔和な人柄をつくるのか。私もそうしたいが、付け焼刃では難しい。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第71号

ホームページアドレス

<https://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中荳ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2022年(令和4年)7月初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学教授

制作

今村浩二

松本裕佳

鈴木彩乃

青木広実

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.18-23)

手塚ひとみ (pp.42-43)

開 洋美 (pp.10-17)

前川太一郎 (pp.24-29)

撮影

大平正美 (pp.42-43)

川本聖哉 (pp.3-5, pp.24-29)

藤牧徹也 (pp.10-17, pp.36-41)

渡邊まり子 (pp.18-23)

印刷

中荳総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター



表紙:与論島東部の大金久(おおがねく)海岸の沖に現れる白い砂浜「百合ヶ浜」。春から秋にかけて中潮から大潮の干潮時のみに出現する人気スポット。グラスボートに乗って上陸する。手前の黒い影はウミガメ 撮影:川本聖哉

(上)屋久島に残る巨大な杉の切り株「ウイルソン株」。空洞になっており、内側から仰ぎ見るとハートの形にも。豊田秀吉の命により伐採されたと伝わる。縄文杉へのルート上にある 撮影:藤牧徹也
(下)加計呂麻島の民家の壁にずらりと並んだクモガイ。スィショウガイ科の巻き貝であるクモガイは、奄美群島や琉球諸島では魔除けやお守りとして用いられる 撮影:渡邊まり子

